家庭雜誌

第六拾八號

一月四日發兌



江見水蔭
星野天知
後藤宙外
泉鏡花
一葉女史

國民之友新年附錄は、新しき人に由て作られたる新しき小說を揭ぐ。
一葉女史は題猶未定に屬す。
水蔭氏は『炭燒の烟』を作り。
天知氏は『のろひの木』を作り、
宙外氏は『ひた心』を作り、
鏡花氏は『琵琶傳』を作れり。
此等の小說が如何に嶄新にして如何に多趣にして、新年文壇に花一枝を添ふるに足るべきは、讀者其發兌の日を以て之を證せよ。

第二百七十七號

本號は印刷部數非常に多し。廣告依賴者は本月廿六日迄に申込可被下候。

日用百科全書第七編發刊廣告

從三位子爵前田利鬯君題辭
從四位子爵本多忠貫君題詠
清谿女史吉田調子君序文

裁縫と編物

全一冊 美裝
（製本既成）
紙數二百六十頁
正價金廿錢
郵稅六錢

挿畫 極彩色口繪：梶田半古筆 ●美人の裁縫●京都西陣 ●洛東雙美●安藝嚴島●京都知恩院●京都祇園社●上野榛名山●山城宇治平等院●富士山●縫の菊の刺繡 寫眞銅版畫 木版彫刻極密圖數十個入

女子の尊き天職は、母として女子を育成し、妻として一家を齊整するを主とす、女子特に家族の衣服類は、一として女子の手に繫らざるなく、裁縫及び編物は、實に女子として、尊卑に論なく、最も必要の手藝たり。本書に於て懇切鄭寧に其順序方法を解明し、一讀其術に精通すべからしむ、他の慰み物に精しくとも、裁縫に迂きは、婦人の耻なるを辨へ玉ふ方は、速かに此書を讀みふべし。

日用百科全書 自第一編至第十二編 目次

●第十三編以下の目次は追て廣告すべし

● 第一編 五版 和洋禮式
● 第二編 四版 茶の湯と生花
● 第三編 三版 實用料理法
● 第四編 三版 家政案內
● 第五編 再版 琴曲獨稽古
● 第六編 衣服と流行
● 第七編 裁縫と編物
● 第八編 住居と園藝
● 第九編 勤學と處世
● 第十編 育兒と衛生
● 第十一編 通俗書簡文
● 第十二編 旅行案內

日用百科全書正價●一冊金二十錢●六冊一圓十錢●郵稅一冊に付六錢づゝ

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

英文 國民之友

國民之友の進步（明治二十九年二月初刊 分冊英文國民之友月刊）

日本は國際生活の圏内に入り、國際政治の要素と爲れり。此際世界を知ると同時に、世界をして日本を知らしむるは、我國民の急務にあらずや。我社が『英文國民之友』を發刊するは此必要に應ぜんが爲めなり。

『英文國民之友』は總ての方面に於て日本國民の眞相を發表せんとを期す。故に政治、社會、軍事、實業、宗教、學問、文藝、美術の諸般に涉りて最新の現象を報道、論評し、且つ歷史に遡りて日本文明の淵源を示すとを勉む可し。

『英文國民之友』は世界に向つて日本國民の意志を代表するの機關たらんとを期す。特に日本人的眼光を以て外交の關係を觀察するは我社の密かに自任する所なり其他諸般の問題に關し、成る可く廣く內國諸大家の寄書を掲載し、以て輿論の趨向を示すとを勉む可し。

『英文國民之友』は外國人が日本に就いて如何に考へるかを知るの媒介たらんとを期す。是れが爲めに成る可く多く外國人の寄書を掲載し、且つ投書欄を公開して內外人相互に思想を通ずるの便を謀る可し。

此故に列國の間に於ける日本の地位に注目するものは內國人たると、外國人たるとを問はず『英文國民之友』を讀まざる可からず。『英文國民之友』は日本人の手にて發兌さるゝ唯一の英文雜誌なればなり。

一冊金十二錢一ヶ年前金一圓廿錢併讀者に特別價一冊金十錢一ヶ年前金一圓●廣告料一頁一回金五圓半頁同金三圓一吋同金五十錢回數に依り割引あり●一吋は五號文字七行の割り端數は一吋に計算す

發行所 東京京橋區日吉町 民友社

德富猪一郎著

參版

國民叢書第八冊

風雲漫録

◎定價拾五錢　郵税四錢

風雲漫録は、明治廿七年九月十三日大纛前進に始まり、明治廿八年五月三十日鳳輦還幸に終る。其間壯重雄渾なる敍記あり、偉大痛快なる議論あり、輕妙多趣なる記行文あり、精深的實なる人物論あり。皆是れ作者の目擊耳聞、魂躍神飛の餘になるもの。其の文章の奇氣横生、雄情淋漓、逸興鬱勃。殆ど手の舞ひ足の蹈むを知らざらしむるものあり。文として讀む可也、事として讀む可也、天下經營の書として讀むも亦た妨げず。

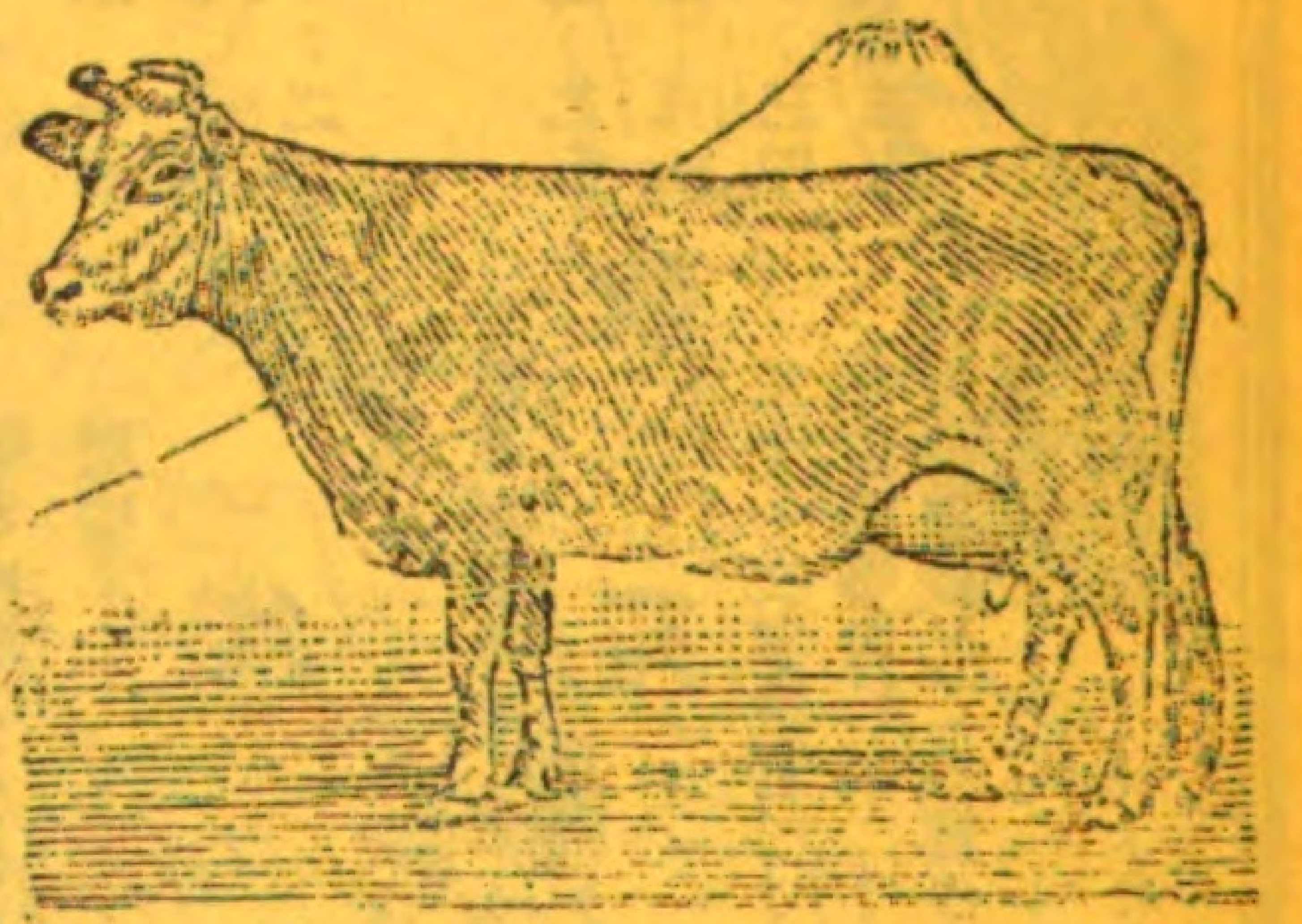
各新聞雜誌に見れし評批は左の如し

◎德富蘇峰氏が征清役以來筆せし稿を蒐集したる書にして筆舞ひ墨躍るの概あり復た近日の快文字と謂ふべし(日々)

◎德富猪一郎氏が昨年鳳輦に陪して廣島にありしをり又征清軍に從うて清地にありし間民友社に宛てゝ送りたる書翰數十篇、曾て『國民新聞』にいでたりしを更に蒐めて小冊子となしたるもの、道中記あり、敍景あり、議論あり何れも著者が當時隨處の感懷を一揮文字に發露したるの概見えて面白し行文また例の詩趣掬すべきもの多し(早稻田文學)

◎名の如く、征戰以來風雲紛々の際に成れる漫録にして、紀行あり見聞記あり、評説あり書翰あり、往々にして發して吟咏となれるあり、亦一好隨筆といふべし(太陽)

京橋區日吉町四番地　民友社



舍主宇都宮仙太郎は米國ウイスコンシン州農科大學乳業科得業生なり
畜牛は毎週囑托獸醫の診斷したる健全の者なり
醫科大學にて毎日試驗濟の上御買上に相成居れば乳質の善良にして安全なる推して知る可きなり
代價は世間並に候御試用の上御吹聽願上候

麴町富士見町六丁目一五

帝國大學醫院御用　回陽舍

電話六百十五番

院長　醫學士　增田知正

婦人科
產科

—◎—

外來診察毎日午前八時より正午迄
入院並に遠近往診共隨時申込を受
手術は大小を論ぜず之を施行す
產婆派出の需に應ず

東京神田駿河臺袋町十三番地(小松宮樓前)

東京產科婦人科病院

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税
一冊	金五錢	五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	地方共 金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

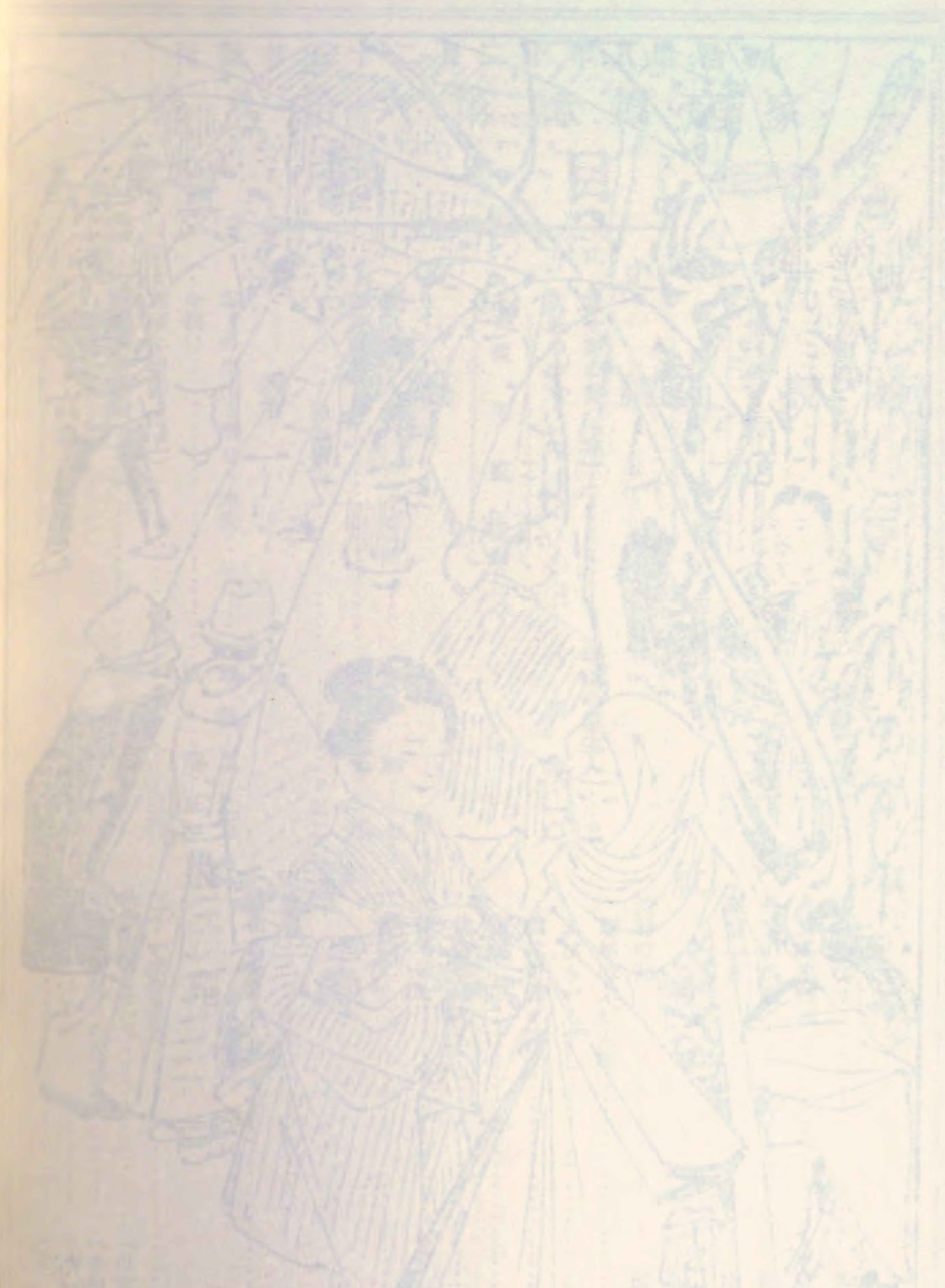
發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿八年十二月二十五日發行

家庭雜誌第六拾八號

目録





家庭雜誌第六拾八號
（明治廿八年十二月廿五日發兌）

社説

物價騰貴と生計

昨今東京市中の景氣は過る明治廿三年第三回博覽會以來の好況にて、此勢ひ他の地方にも及びしかば、物價は日々に騰貴し、職人の賃銀も騰貴せる現象を見るに至りしは、これ全く日清戰爭の結果によりて通貨の日本全國に散布されたると、米穀登りしに係はらず米價は依然として九圓臺を下らず、生絲の相場頗る好況にて農家は眞に福々圓滿の年柄なりしかば、先づ地方人士より非常に購買力を增加し、斯く世間の好景氣を來すに至りしものなり、加ふるに日清戰爭の戰功により軍人軍屬は年金または一時金下賜の恩命に遭遇したれば、此勢にて三府五港其他の市内に金錢の流通宜しく、之が爲めに一層の景氣を添え且つ物價をして昨年よりも三割乃至四割方も騰貴せしめたり

物價騰貴し生活の程度の增進するは一方より見れば寧ろ國家のために賀すべき現象にして、必らずしも杞憂を懷くに足らず、本年の好景氣につきて最も利益を受くるは、商人又は職人にして、孰れも物價若しくは賃銀に三四割の騰貴を見るに至りしかば、たとへ其生活費が增加するも、收支相償ふを得れども、物價騰貴のために最も多くの影響を受くるは、一定の給料によりて生活する中等の家庭なり

薪炭、油、醬油、八百屋物、肴屋其他日用品の物價騰貴の爲め、先づ差當り臺所の恐惶を來し、中等の家庭の細君達の苦心察すべし、入るに限りあり出づるに限なからんとす、これ一家の給料によりて生活する中等の家庭の細君達が最も苦痛を感する問題にして、また

如何にして此苦痛に打勝つべきかは、各家の細君達の研究すべき問題なるべし

さて昨今物價騰貴を平生より三割として、平生三十圓の生活を爲せる家庭にては三十九圓の生計費を要し、平生二十圓の生活ならば二十六圓の生計費を要する割合となる、平生三十圓の生計費にても二十圓の家庭にても、倘も足らざる家庭多きが常なるに、其上九圓若しくは六圓の餘計なる生活費を増加するとせば生計の困難思ふべし

然れども世の中は上を見ても限なく下を見ても限なきにあらずや、此時に處する細君の心懸は、生活の程度を三等も四等も下るの外なし、之を細密に言へば是迄一度の食事に一人前おさいの代一錢と見積りあらば、これからは三四割を減ずるとか、浴湯にても一日越に行く所を二日越にするとか、徒食を爲す所を減止するとか、衣物にても欲しいものを我慢して居るとか、五日越に髮を結ふ所も一週間越に結ふとか、又主人の方にても外に出でゝ車に乘る所も徒歩し、一ぱい呑む所も我慢して居らば、たとへ物價騰貴するも、左程に狼狽するに及ばず、何しろ本年は日用物價騰貴せりと雖も、第一肝腎の米價の暴騰を見ざれば、一定の給料にて生活せる小官吏又は小紳士の家庭にても左程生活し難きこともあらざるべし

平生貯蓄に心懸ある家庭にては、決して斯かる場合に遭遇するも、倘ほ貯蓄をしても悠々迫らざる生計を見るべし、平生貯蓄心なく足らず〳〵で暮す家庭は、物價騰貴に遇はずとも矢張困るに相違なし、かゝる場合に恐惶を來すよりも平生貯蓄の美德を養ふこそ肝要なれ

隱士と轡蟲

或る隱士、人々の、名譽を得ろとに、絶えず奔走し、常に徒らに騷がしきを厭ひ、世を避けて山の畔に廬を結び、さらぬだに憐を催す、物淋

しき秋の夕、獨り自ら几に凭りて、人生の問題を考へ居りしに、多數の轡蟲、家の周圍の叢に集きて、ガチヤガチヤと、喧しきこと限りなく、うるさきことに思ひて、隱士は庭に出で、其の何故なるかを問ひけるに、轡蟲は皆口を揃へて「餘りに世間は靜かなれば、沈鬱を破らんがため、聲を發して、人々の注意を促すなり」と、答へければ、隱士は頭を掉りて「否さよ、汝等の心なく鳴けば鳴くほど、我は愈々秋の憐れを感ずるなり、頓て汝等の身の上にも悟ることあらん」と諭しけれど、轡蟲は耳にも入れず「我等が訴ふるにあらざれば、世は遂に深き睡りに沈みて醒めざるに至るべし」と、尙大得意になりて、ガチヤガチヤと呼び叫びけり。

時ははや霜枯の頃となり、蟲の音は、次第に弱り行き、微かにしてきこえぬ程になりければ、隱士は僅かに生き殘りて、垣の下に潜み居る、轡蟲を見出だし、告げ語りけるは「汝等今は定めて思ひ當れるならん、演說場裡大言壯語の勇も、老いては用ゐるなし、汝等の生涯何事を剩し得たる、公衆に持て囃されしも、彼も只一時のみ、されば世の榮譽は空しき一場の夢に過ぎず」と。

草蟲野に叫びて秋色却て寂し

史談

富士野の譽（四）

嵯峨のや主人

第九　母子の離別

母子別は、愛人の別にも增して更に一層の哀です、然し拙い私の筆で描かうよりは、寧ろ曾我物語をそつくり其まゝ轉載した方が、宜らうと思ひ、此に轉載する事に致しました

之より先き十郎は五郎を障子の外に待せ、己れ唯一人内に入りて、母を種々と言なだめました、母も涙を流して、和殿に郎黨一人とらすと思ひて、勘當許すといふ、十郎大に喜び、急ぎ立出て五郎に打向ひ勘當御免の旨を述ぶる、で五郎内へ入る、是からが物語の文、五郎内へ入喜び涙せきあへず、末の疊に居直りけり、

母と目を見合て五郎伏目になりつゝ、右左の袖を顔に押當ければ、母是を見給ひて、遙に見ねばや老ぐみて見ゆる物かな、十郎より老ぐみて見ゆ、あれ程に成ま



で、見ざりし事の淺ましさに、けしかる心にて、男に成たる計を思ひて、勘當しつるよとて、涙もかきあへず、語り列て泣給へば兄弟は申に及ばず、有合女房達に至るまで、各袖をぞしぼりける、扨兼て期したる事なれば、形見にせんとて、十郎申しけるは、是に候ふ小袖が、餘りに見苦しく候、間、よからん小袖ひとつ、借させ給へと申ければ、母是を聞召、よくなけれども、新しければとて、連錢付たる、淺黄の小袖取出し、賜ければ、白き小袖を脱替て、是を洗はせて賜り候へとて打置たり、母宣けるは、十郎殿は常の事なれば、常の小袖を參らする、五郎殿はたま〳〵の事なればとて、白き唐綾の小袖を出されたり、但し此小袖どもは、誰にもとらせず、狩場より歸り給はゞ返し給へ、十郎殿小袖も帷子も借といひて終に返し給はず、是は曾我殿の見知給ふ小袖なり、再び見せ申さずば、例の子供に取らせつらんと思はれん歟、耻しければ申也、心狹き事とばし思ひ給ふなよ、各の小袖ども、よろしく計ひ仕 候て、置んずるぞと宣へば、五郎もかた〳〵の隅に立寄て、練貫の小袖の着損じたるを脱置て、是はあまりに見苦しげに候へば、人に賜り候へとて打留ぬ。其後十郎が方へ歸て、二つの小袖を、二人は中に居置て、うれしくも形見とも賜りつる物かな、失はずして返せと仰らるゝこそ墓なけれ、

生て二度歸るべき物ならばこそも、二人額を合て泣にける、五郎申けるは、十郎殿には父の御事、五歳の御時なれば、たしかに覺ゆると語りたまふが、時致は三歳なれば、たしかに覺えぬだに斯ばかりも戀しく候、ましてや廿有餘までそだて給ひし母の御恩、報じ奉らずして死なんことこそ悲しけれ、御勘氣の身なれば、近く見奉ることもなかりしを、ゆるされ奉りて、二日ともなくして出なん事の悲しさよ、なからん後の形見は、筆の跡にこそとて、

今日出てめぐりあはずは小車の
その輪の中になしとしれ君



十郎祐成生年廿二歳、なきあとのかたみに御覽じ候へと書置てけり、其跡に五郎も又

定なきうき世をさらに思ひしれ
問るべき身のとはん旅には

五郎時致生年廿歳、なき跡の形見に御覽候へ、親子は一世の契りとは申し候得共、亦後生にも參合奉るべしと書付て、何れも結び合せつゝ、玉手箱のかけごに入てぞ打立ぬ(中畧)兄弟二人馬に乘て打出けるが、鬼王を使として暇を申し入れければ、母は此由を聞し召、各にいふべき事あり、立歸り給へと宣へば、馬より下て、母の御前へぞ參りける、母は門出の御酒召とて、盃を出されければ、十郎取て五郎が方へ向ひ

ければ、母是を見給ひ、兄なれば十郎殿こそと有ければ、しばらく押て居たりけり、母盃を取給ひ、我呑んとて召れつゝ、十郎に賜りければ、十郎三度呑て五郎にさす、五郎三度呑て置ければ、先の御盃は助成に賜り候ぬ。五郎にも御盃賜り候ひなん、道の程御祈とも成り候なんと申ければ、母打笑、盃を召て五郎に賜ひ、あの子上戸か下戸かと宣へば、十郎承はり、今三度給り候はではと申ければ、今三度と仰ければ、五郎盃を扣居たる所に、母仰けるは、相構て人と争論し給ふな、大名の子供と懸組たまふなよ、樂しき人は貧者と見て、おこかましげに見えて、詞も賤敷成安し、そればし咎給ふなよ、總て樂しき人々と、昵び物いふ事有べからず、親しき中なれば、三浦、鎌倉、和田、畠山、本間、澁谷、曾我、中村、松田、澁美、早川の人々には、申合せ給ふべし、心はやりに鹿ばし射たまふなよ、上の見參に入ねば、弓矢は持ずとも有べし、御免もなきに御供して咎られやせんずらん、如何にも事ばし起し給ふなよ、年來養育せられし曾我殿に恨れたまふなよ、進まば兄なれば、十郎制し給ふべし、又時致も心を添、互に助合給ふべし、當時の心向は知らねども、箱王殿稚かりし時も、物の心得有しほどに、兄の命に背給ふな、構て互に中よく助となりたまへと有ければ、五郎は思ふ事いろにも出さゞりけるが、十郎は涙を浮め、御教訓を承はるも只今の事と思ふにぞ、不覺の涙出ければ、色にぞ見えしと急ぎ出にけり、母は見給ひ、御酒今一つと仰られければ、涙にくれて眼もくらく、妻戸の障子の緣に足をさゝへて、ひれ伏にぞ倒れける、乍去何氣なき躰にもてなし、空ぶきして、袴のくゝりが懸りし故にと云ければ、母是を見給ひて、今日の出立をば止り給へかし、首途にて倒るゝ事こそ、然るべからねと宣へば、五郎承はり、道行人のころぶ事は常の習ひ、馬に乗り輿に乘てさへ、

落る者の多くこそ候へ、さればとて其の道を止る人や候、左申さば道ゆく人は候はじとて、心閑に三度呑てぞ出にける、實に心强くぞ覺えける、五郎遙に出立しが、母を今見奉りしかど、如何にもして今一度見奉らばやと思ひければ、御前に候扇に、此扇を取替て賜り候へとて、惡敷扇を取替てぞ出にける

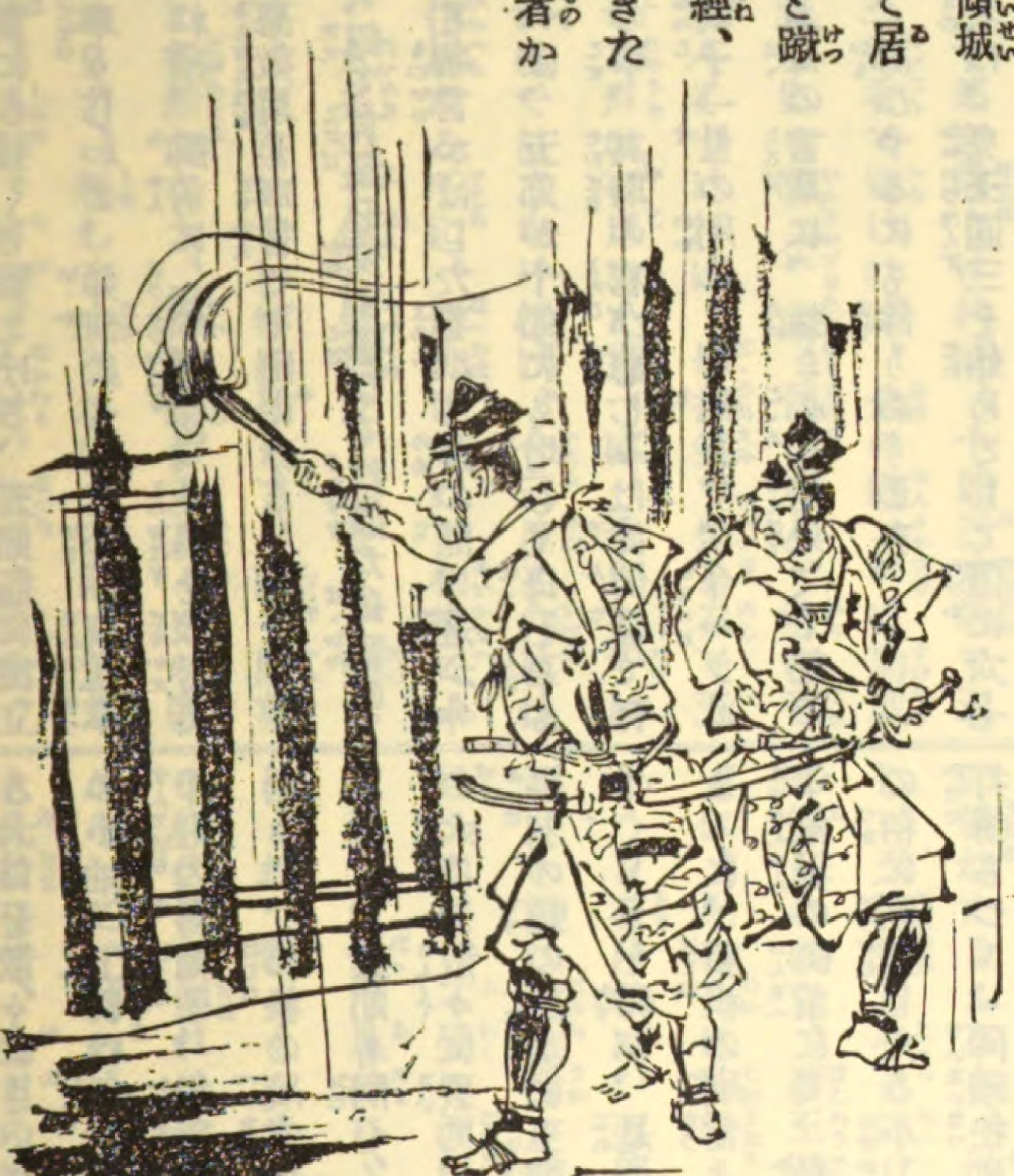
嗚呼此四五年來、絕て言葉を交す事なく打過た母親に、久振でしみ〳〵と物言かはした喜びも夢の間、是が今生の分れ歟と思へば、五郎が十郎にも增して母を慕ふは、元より當然の事、其時の喜び悲しみは如何樣で有ましたらう?、親子一世の別れとも知らず、今一ッと盃を探りていふ母の言葉に、猛き心も消果て十郎の泣伏した胸の中、思ひやるにも餘りあります。

斯て兄弟二人の者は、鬼王團三を始めとして僅に六七人の友を連たるのみ、年頃住馴れた故鄉を離れ、我家の方を見返り〳〵、富士野をさして趣きました。

第十　富士野の討入

十郎が其夜の打扮には「白帷子の腋深くあいたる黃なる大口を散々にさいて、下には大磯の虎が着替たる綾の小袖、上には村千鳥の直垂に玉たすきを擧つゝ、一寸班の烏帽子、掛緖强くして、赤銅作の太刀の寸延たるに、箱根の別當の元より得たる、黑鞘卷をぞ添たりけり、五郎も同じく白帷子の腋深くかいたるに、白の大口を散々に裂て、下には淺黃の小袖を着、上には揚羽の蝶の直垂に玉襷を擧て、遠雁金の附たる紺の袴のくゝりを結び、是も一寸班の烏帽子に掛緖强くするまゝに、箱根の別當より賜りたる兵庫鎖の太刀に、一年權現の御前にて、敵左衛門尉が手より得たる、赤木の柄に胴金したる小刀をぞ持たりける」各此如くに打扮ちつゝ、陣續松に道を照させ、態と高物語してゆく程に、やがて工藤が假屋の前へ來ました、十郎入らんとして五郎に向ひ、如何に五郎殿、假屋には傾城共

あまた有つるぞ、無益の罪造に、女ばし手に掛たまふなよ、仰迄も候はず、吾も其心得、候といひながら討入ました。助經傾城と枕を並べて眠て居る所を、枕を丁と蹴て、如何にや助經、敵持たる身の、きたなくも寢入たる者かな、起てやッと呼ぶ聲に、助經驚きて目を覺し、枕刀を把て立擧る所を、兄弟右左よりはたと切倒し、形の如くとゞめをさして椽に躍り出て、高らかに名乘を擧たのは、如何に喜ばしい事でしたらう、其名は富士の高峰と共に、末代迄世に傳へられて、孝子の鑑と譽たゝへらるゝ事となりました



第十一　二人の畧評

世には五郎を以て無分別のあばれ者とし十郎を以て分別のあるおとなしい男と稱するが、此說には私は不同意です、成程五郎は豪氣の若者、十郎は優美の若者で有たには違ひない、が五郎が無分別といふに至ては、大に否々です、十郎は意思も强かッたが、感情に脆い質故、徃々意思が感情に打負て、分別を缺くこと却ッて五郎より多かッた、其に引替、五郎は感情も强かッ

たが、意思は實に確乎たる者で、意志が感情に打負るなぞといふ事は、殆んど無かッた位であッた、されば十郎が大磯の虎に馴染を重ねて通ふ時も、五郎は影の形に伴ふ如く之に隨ひながら、決して傾城に馴染むなぞといふ事は有ませんでした、又十郎は五郎の諫をも聞かず、胸中の望を異腹の兄京の小次郎や、又從弟の三浦與一に語て、殆んど大事をあやまらうとした事さへある、五郎は斯る大事をあやまらうとした事はない、要するに五郎は、其勇氣に於ても思慮に於ても、慥に十郎にまさるとも劣りはしなかッたのです、然し私は血肉の兄弟、孝も譽も劣りまさりのない二人の間に、優劣を附やうといふ心は毛頭ないのです、唯世人が五郎を無分別者の樣に思ひ違へて居る故、此に一言を述べて彼の爲めに辨じて置のです、其に五郎が母を慕ひ、兄を大事にする心の如何に深く、神を信じ佛を念ずる信仰の如何に敬虔なる歟、五郎は決して一勇の人ではなく、又やさしい心も備へて居た若者でした。其事に觸れ物に附てよく歌を咏むのを見ても、剛氣の中に自づから優美の情をも備へて居たのです、然し情婦に向て戀々の情忍び難く、故鄕を顧りみて斷腸の思ひに堪ざる如き、人情の高潮、極致を極むる十郎が風流の風采は、五郎に於て見ざる所です。若夫れ武勇の風采に至ては、二人共優劣はない樣です。今富士野の狩の二人の風采を述べて、此話を終る爲め、此處に曾我物語を引ませう

五郎は片岡に打上り、馬を下りかしらに引立たり、十郎は遙に引退て、原中に薄を分て控居たり、十郎が其日の裝束、下には母より賜はりたる連錢付たる淺黃の小袖、上には秋の野に蝶の丸の直垂、夏毛の行縢、生張に裏打たる竹笠を谷風に颯と飜し、鹿毛なる馬に鞍置て打乘り、切羽を以て矧だりける、大の鹿矢を弭高に取附、二所籐の弓の眞中取て、四方に眼を賦てぞ

控ける。五郎其日の裝束には、下には母より得たりける白唐綾の小袖を着、上には早川の伯母より賜はりたる、神無月の木の下に、鹿の妻戀躰に、紅葉の落葉付たる直垂に、星白の行縢、鷹の羽にて矧だりし大の鹿矢、白藤の弓を持ち、萠黄にてうら打たる竹笠、鴾毛の馬に、白覆輪の鞍置て乘たりける

と是彼等が狩場に於て敵を狙ふ時の打扮で如何に其風采の勇壯且優美で有ませう、實に彼等は坂東武者の好標本では有ません歟、其大鹿二ッ上の峯より遁れ來るを、態と射損じて遁すなぞ、如何に二人共やさしい心を持て居たのでせう、親に孝なる程の者、何條禽獸にも情がなかりませう、其心を思ひやりては涙の外はありません、私の樣な不孝の者は、兄弟の話をするには堪ません、大に潜越でした、失禮、次號には又何人歟の話を致しませう。

（完）

勇敢の少女

八萩生

（一）

勇敢のシンシア、スミスは、今日もし長生なし居らば、早や白髮の老女なるべきも、未だ千七百八十年の頃は、うら若き一少女にて、南コロリナ洲なるサンチー河の邊に住したりき。

シンシア僅か十四歲にして、丈四呎二吋、健全なる反逆の志を有したる事は、廣き亞米利加にも又となき程なりき、（反逆とは英政府に反對するを以て呼ぶ）五歲の時、有名のボストン、チー、パーチーの騷ぎの話を聞き、英國政府の壓制は、如何に小さき心を刺激なしたりけん、而も其翌年全くボストンの港は閉されぬ、時に父は秋の收穫をば軍糧として北部へ輸送なしければ、一握の米すら自由にはならざりき、其後間なく、兄のジョンは、叔父のヘゼキヤを見舞んとて、マサチ

ユセッツ州に出立せしが、次の六月バンカー丘の戰に戰死せし悲報を齎らされたりき、さればシンシアは兄妹の情にうたれて、手織の粗末なる前垂もて、落る涙を押拭ひてさめ〲と泣きしも次兄のトムがワシントン公に隨從して、出軍するを聞きては悲しき如き、嬉しき如きの情に打たれつゝやうやく涙を拂ひぬ。其後程經てトムは書を家族に寄て曰く

『自由を得るか死するか』と肌衣に記し心にも亦『自由を得るか死するか』とやきつけましたと、

之を見て、母は情に得堪へぬものゝ如く、手を揉み、父は苦き笑を洩しぬ、

父『マテ御前方は……もう直ぐに此近邊で、戰せなくてはならないよ』

何故に父は斯く云ひしか、トムの手紙を見たるウヰルとエベテザルの二弟は、最早堪へんとして堪ゆる能はず、是非共トムの後を追ひ行かんと、願ひける故、さては待てよと聲かけしなり。斯る有樣なればシンシアもア、吾男なりせば、英國と戰ふべきに、女なるこそ殘念なれと、呆然として、愛國の熱情に激せられしも、あわれ女の身は、上衣、股引を縫ひ靴下を組む等、隨分多忙の身なりけり、

千七百七十六年シンシア時に八歲、二大事件は起りぬ――少くもシンシアに對しての二大事件は起りぬ、一は八歲の少女には、少し解し難き獨立戰爭檄文に調印する事にして、今一は、スミス家の物置小屋に赤白斑なる犢の生れたる事なりき。

父が檄を讀みて『人間は自由平等……』の句に至るや、小き心も愛國の熱情燃ゆる如く起りしも、今生れし犢はシンシア一人の所有物と云はれては、何事も打忘れて、狂喜の如く小屋に走せ行きぬ、

さりながら自由平等なる感情は、はげしく心をうちしものから、せめては其感情を保ち、堅めんとて、犢の

名をばフリーン、イクチールと命じぬ、フリーンは、凡の威權を輕蔑せし如く、後足高く刎ね廻り、飛び廻り、活潑の心は、抑ゆる能はずして、牧場を東西に駈けめぐり、誰が呼にも止まらねど、唯だ愛らしきシンシアの呼聲を聞ば、かけ行けり、（フリーン、イクチルの意は譯して自由平等と云ふべきか）

（二）

スミス家より外に小兒ある家は、六哩の間、一軒もなかりければ、シンシア唯一の遊び相手は、實にフリーンのみなりき、フリーン成長して、牝牛となるや、シンシアとの親しみ愈深く、如何なる秘密もフリーンに告げて其同意を求めぬ、さては腕ぬきを兄のトムに贈る事すら相談なしぬ、然りながらトムは早や、腕ぬきも不用ぞかし、アヽ彼は恐ろしきフチルッ谷にて、饑と寒の爲め、他の兵士と共に死したりき。斯るあわれなる悲しき、報知をきゝ、詳しくフリーンに告げなば、必ず牝牛も其悲を、察せんと思ひしシンシアの、心の中こそやさしけれ。

越へて數月、ラフエーットが亞米利加を助けんとて、佛蘭西より來る由のうれしき、樂しき報知に接して、小屋に飛び行きフリーンに告げぬ、されど僅か二十哩のチヤーレストンは、サー、ヘンリー、チルトンより攻め落されしと聞きて、喜は直に消へ、はげしき心の悲は、フリーンすら涙を浮べしかと、思はるゝ迄、すりゝ上げ、しやくり上げて泣き伏しぬ。

其後一二月經て、總督ゲートの一軍は、南カロリナに攻め寄せければ、兄のウヰルとヘゼキヤとは、父ともく〱、ゲート征討に出陣なしければ、身の悲みは愈まし、又た如何に身を處すべきやの、境遇に立ちぬ。此時フリーンは首を振りて、聲低く長く、『ムーウ』とうなりぬ、其樣如何に悲く又苦しく『アヽ愛する君よ、此後吾々は如何に身を處すべき

か』
と云ふ如くなりき、さても此時健氣やな、シンシアは
決然涙を振て云ひぬ、
『よし、吾がこの後なす事とては、吾身を謹しみ保たんのみ、‥‥母と吾とは米麥こそ氣をつけめ、汝は又た汝の身をつゝしみ、汝がなすべき事を忘れず、愈強く健かに、前より倍の乳を給しくれよフリーンよ』
此時に當りては英兵しきりに、田舍に入り來て掠奪を事としければ、まことサンチー河の邊も、少しの油斷はなす能はざりき、さりながらシンシアは少しも心に恐を抱ず、コロンウエルが三哩の近きに來りしも恐れず、毎日〳〵フリーンと餘念なく遊び、天使と厨戸の後ろに立ちかけ置ける錆び朽ちたるライフル銃とは、確かに吾身を守護なす事を信じぬ。
或時は遙かに地平線を破りて、朝雲の靆く如く、緋色上衣を着したる軍兵の現わるゝ事あれども、近きわたりの森中に、薪を拾へる其折に、思ひ掛なき梢にて聲高らかに囀れる、胸紅みたる駒鳥程にも驚かざりしも、此處に喫驚の事ぞ起りたる。
或日の午後なりき、薪束ねて背に負ひ、勞れし足を引ずりて、歸り來れる其折に、母は待つ間も氣を急きて、
母『シンシア彼奴等はッ、フリーンを持て‥‥しまッた』
シンシアも息せわしく
シ『彼奴等ッて‥‥誰れッ‥‥誰等ですかッ』
母『赤兵よ‥‥フリーンの角を細でくゝッて、お彼の陣屋に‥どうしようシンシア、シンシアどうしよう』
（赤兵は英國の兵士を云ふ）
之を聞きたるシンシアは、言をも云はず、疾風の如く飛び出しぬ。
塵起つ道を走せ去れば、黄色の帽は風に取られ、黄金

色の房々したる垂髪の肩にかゝりてふら〳〵と風に靡けるうるはしさも蹴立つる塵に打染まり、一哩行き二哩行き、三四哩と進み進んで、遂にコロンウエルの中陣なる一小屋に達しぬ、……何の猶豫もあらくれの田舎育の其儘に、ツカ〳〵と突き進めば番兵は、『誰だッ』と云ひしも、恐れざるシンシアは一言も答へで、直に本陣に進み、遂に應接間近く進み行きしに、此時恰もコロンウエルは大机にかゝりて、六人の配下の將校と、牛飲馬食の時なりき。

（三）

シンシアは先づ戶しきりに歩を止め、恭やしく禮をなせし時、コロンウエル後目に見たりければ、第二回の禮をなし、徐に、紅の唇を開て、話の緒をきりぬ

シ『私はシンシア、スミスで御坐います……今阿那多の兵隊樣がフリーン、イクチル、スミスと名けました、私の犢を盗みましたから、もし阿那多が御許し下さいますなら、連れ歸ろふと思ひまして』

手にコップを持ちながら、コルンウエル問ひぬ

コ『御前の犢かい』

シ『あの人等は繩であれを曳て來ました』

コ『御前は何處に住でるかい』

シ『三哩あちらに母と一しよに住で居ます』

コ『父はないのかい』

シ『父と兄弟四人御坐います』

コ『御前の御父さんは何處に居るかい』

シ『大將閣下、父はゲート君と戰て居ます』

コ『オー、それでは反逆人だッ……反逆者だねー』

シ『ソー、ソーですとも阿那多ッ』

と最と氣高く、横柄に答へぬ、

コ『そふして……御前の兄弟は何處にかい』

此問には流石の勇氣あるシンシアも、暫時たゆたひ紅き唇振はしつゝ眼をしば叩いて

シ『ジョーンはバンカー丘の戰にワーレン君と共に……上天致しました』

之を聽きたる一年少士官は、竊かに笑を催しぬ、されど威嚴ある大將コロンウエルに後目にかけられて、心に恐れけん則ち笑を止めぬ、シンシアは猶語をつぎて

シ『そしてトムはワシントン公を助けて居まして…………フチルジ谷より之も上天致しました』

コ『他の二人は何處に居るかい』

シ『閣下、只今軍隊の中に』

とて下げし頭を再び眞直になしぬ、コロンウエルは指して

コ『わつちの本隊にかい』

シ『ソーです／＼』

コ『それでは何だね……御前の話を誠とすれば、御前も反逆の片はしだね』

之を聽てシンシアは強くうなづきぬ、コルンウエルは猶語をつゞけて

コ『それでも慣取りに此處に來たのかい……私はフリーンも反逆者と外思はないよ』

シンシアは暫時無言なりしが

シ『もしフリーンが足が二本で角がないなら反逆者とも思ひます……詳しゆ云へば反逆者には違ひ御坐いませんけれども、そふすれば阿那多は恐らく慣とは云ひなさいますまい』

之を聽きてコロンウエルは思はずふき出し、室の鐘すら鳴る如く、温厚なる熱心の笑をなしければ、先にジヨンの死をきゝて笑をもらしコロンウエルより目玉くらひし士官も其他も皆供々に笑ひどよめきぬ、シンシアは呆氣に取られて、何故斯樣に笑ふやらんと心に不審しみつゝ足しびるゝまで、立ちたる儘動きもやらず、樂しき笑の終ゆるを待ち居たり『されど必竟自分が笑はせしには違ひなきも、何でわんなに笑ッたか』と獨

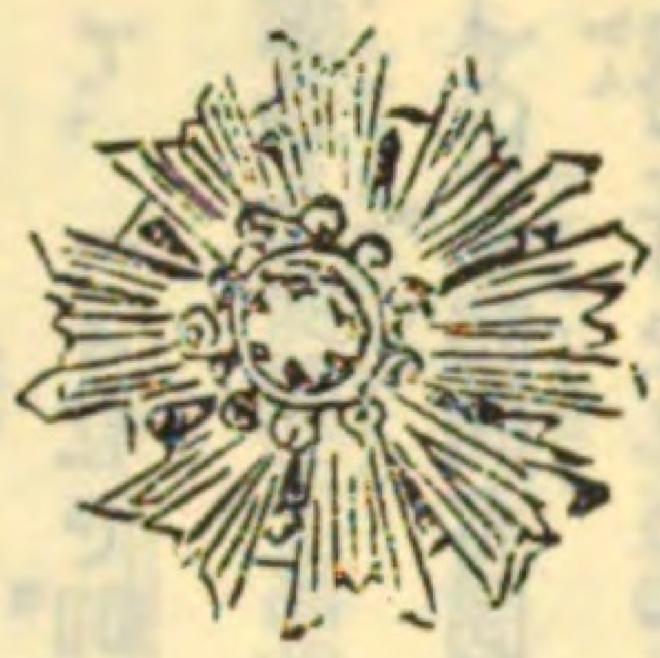
り考へて遂には、赤面するに至れり。
コロンウエルはシンシアの可愛き頬に紅葉して、如何にも耻らひし躰に氣付きて笑を止め
コ『此處に來んかい‥‥スミス孃！』
コ『御前の牝牛は明朝屹度間違なく送るから、御前は小屋で見る事が出來るよ、そして‥‥多分‥‥』
と自ら嵌め居りし銀のしめ金をはずし
コ『‥‥多分御前は‥‥御前の樣な者には害をせないと思ふ者が贈物をするなら、受取るだらふ‥‥決して虚はない事を知て居るから』
斯く云ひ終て、つと立ちつゝ棚の上なるコップを取りげれば配下の士官も亦しかなしぬ、
コ『茲に吾人はかくも忠實なる反者の健康の爲、天の幸ひは、彼等の上にある樣祝杯をあげん』
シンシアは告別の禮をなし、輝くしめ金を取り上げつゝア、又たフリーンは吾ものになりけりと、心に喜び確めつゝ其室を去りぬ、實にや此牝牛ありてシンシアあり、シンシアありてコロンウエルありしなり、シンシアが貰ひうけししめ金は、今も尙ほ其子孫に、家の寶物として保有したりき。

親王萬歳

頃は五月の末つかた　我か皇國の新領地
臺灣島の土民兵　無智の嗒家と共和黨
黑旗と共に反旗せり　其征討は近衛兵
基隆臺北平定し　金をも鑠かす炎熱に
太姑陷山跋渉し　匪徒の巣窟覆へし
光華山の大敵も　思ひの外に敗走す
後壠苗栗打破り　攻め行く近衛の勇しさ
要害固き八封山　一擧忽ち占領す
臺灣彰化陷りて　敗兵尾擊は愉快なり
川深けれど舩もなし　秋高けれど馬肥へず
再び南進嘉義を取り　第四旅團と聯合し
鳳山よりは第二師團　海と陸とのはさみ擊ち
敵は木の葉と散り亂れ　劉永福は降伏し
光りかゞやく日の本の　譽は高き近衛兵
高砂島の千代八千代　能久親王萬々歲

（樺山建吉作）

文藝



勲八等の小使

某社　琴駒

我社に山中柳太郎といふ小使あり、年は二十四五、出身は愛媛の松山といふ。額の色は澁を染めて、眼光凛ゝしく、口元の苦味走りたる處に、いかめしき面相あり。今日より何卒お願ひ申します、と唯一言、編輯局に來て挨拶したる當初は、無口にていかつく、何處やらに稜角のある小使よと、笑の種を蒔きしが、居慣るゝまゝに、使ひ慣るゝまゝに、辭少なきは中々に品多き實を顯はし、稜角のとれぬと見えたるは、規律正しく、苟めにも杜撰の擧動なきにてぞありける。小使と呼べば、時を移さず机卓の前に現はれ、一揖して姿勢を正し、兩手を垂れ、少しく體を屈めて、上眼に命者の顔を戍り、靜かに使命を聞終りて後、一禮して去り、復た來りて一禮し、初めの姿勢をとりて、謹みて復命するさまは、宛ながらに士卒が陣營に在りて、上官に對するが如しと、口悪き記者どもの、筆を措きて又笑ひながらも、殊勝のものに彼れを思はぬはなかりき。

程經て或朝の官報に、第十八回論功行賞の姓名を掲げられたり。記者の一人、徐ろに撿閲しもて去りし端なく

叙勲八等授瑞寶章　陸軍歩兵一等卒　山中柳太郎

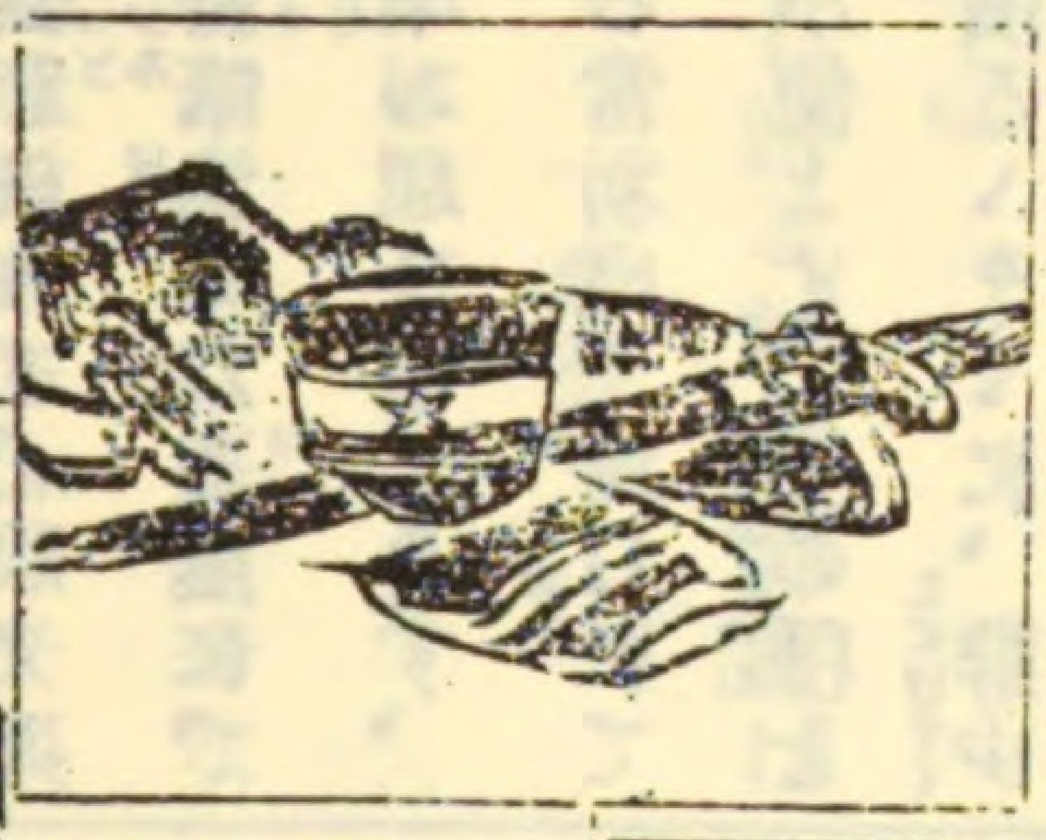
とあるを見出して、ハテナと急に小首を傾け、不思議なともあるものかと獨語くを、何事ぞと問へば是れ見給へ、小使の名が書いてある、同名の異人か、異人の同名かと、同じ意味の辭を仔細げに繰返す。成程同名

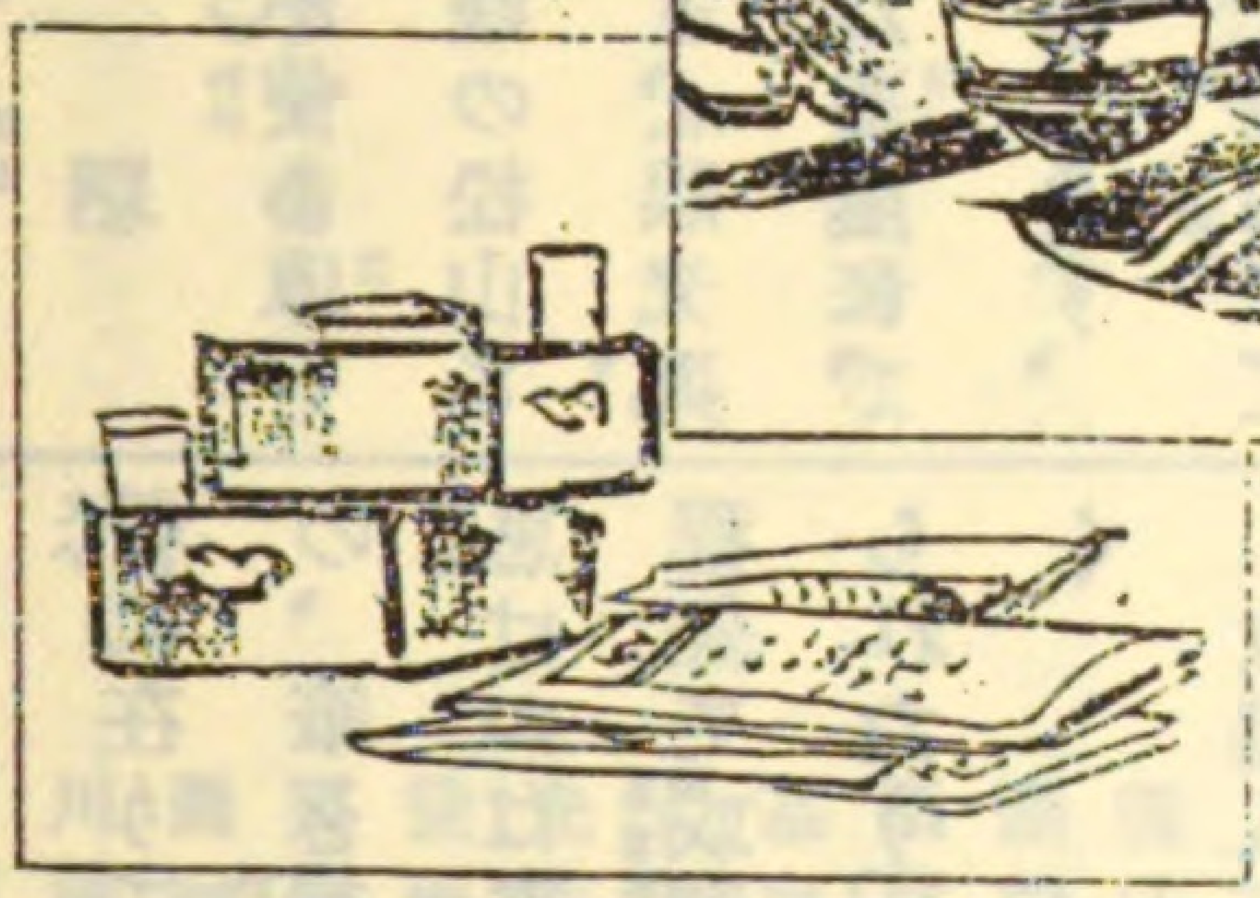
異人は世にその例少なからず、大方はこゝの小使ではあるまいと思はるれど、揣摩よりは、兎角對决が早分りと、氣早きものが呼立つる聲、小使々々と疳走る。

歷階して樓上の編輯局に入來れる小山は、例の一揖して姿勢を正しぬ。是れはお前かへと、嘲りがましう問へば、指されたる姓名の上に、靜かに慌てざる眼光さと注ぎて、へイ私で御坐いますと笑ひもせず。

では矢張同名同人かと、全局は暫し奇異の感に打たれぬ。無言の中に冷かなる輕侮の念は消えて、敬愛の念ぞ、油然として人の膓を潤したる。

ア、左樣か、それは何よりおめでたいとと賀べば、始めてへーと微笑の底に滿足の意を見せぬ。何の師團にて何處の戰爭には出合ひたると問へば、お話し申す程のとにもあらずとて答へず。强みて語れと迫るに、やう／＼口を開きて、師團は第五にて、戰爭は平壤より田庄臺までの間、都合六たびと半ば口の中に物語りぬ。今迄左る氣色をだにほのめかさゞりしは、解隊の砌、上官より擕へて戰功を人に語るなとありし命令を、堅くも守り居たりけんを、世渡の道は、可惜勇士を小使となして、今將た彼れが上官とも賴みたる編輯員の、物語れとの命をえも背かず、從順なる彼の心ならずも、その秘密を傾けしなるべし。





思へば吹雪散る遼東の野に、連發の銃おつ取つて、突貫の鋒には薄を亂し、敵の猛將第一と聞えたる、伊國唐阿の白騎兵を喰止め、射伏せ突伏せたりしその手にて、茶を酌み、吐月峯を掃ひ、反古を取片付くる彼が境界のいぢらしさよ。鴨綠の水

には鞭を投ぐる勇もあれ、血誠は世を渡るべき筏ならず。
斯く思ふにつけて、忠勇なる兵士の、今は瑞寶章を賜はりし彼を召使ふとの、何とやらん勿躰なうなりて、その日より編輯員の物言の、俄かに改まりしも、淺ましの人心也、何にしても目出度いと、一同彼を圍みて、勳章小使閣下萬歳とぞ頌へける。

壽賀の君

藤島雪子

四十餘年の長き年月を、一日の如く主家の爲に心をつくし、たゞ主家あるを知りて、我身ある事をしらぬは、横井家の老女壽賀の君なりけり。あはれ今年六十八才の齢をかさね、心も身もともに幾多の困難の波にたゞよひ、數度の浮沈にさすらひ、そを凌ぎ／＼し結果にやあらむ、去年の春雨眼ともに明を失ひて、花のゑまひなつかしけれど見ん事かたく、月の光さやかなれど仰がん由もなき身と成ぬ。もし世のつねの婦人なりせば殘りの齢をいかにはかなみ、いかにおちきなく思はんを、壽賀の君はいよゝおのがつとめに身をさゝげつゝありといふ。さるは月は既に光を失ひぬれど、心はいとゞ明らかなれば、家の内の掃除料理の手助けをはじめ、幼子を湯に入れ衣のぬぎかへなどに至るまで、更に人の手を煩はさず、暇ある毎には雜巾をさすなど、健全なる人よりもげにつとめいそしむとか。先つ頃自からさせし雜巾を諸方のしるべに頒つとて、吾方へも一つおこせしを見るに、白き金巾に赤き糸をもて、たてよこといちまつに縫ひたる、恰もうつくしき花の形をなして、あやしくうるはしければ、わが机のうへにすゑおきて、學びの友の訪ひくる折ごとに見せもし語りもするに、しるもしらぬもともに、かつは其巧なるわざをめでたゝへ、かつは其たゆまぬ力をめでたゝへ

ぬ。

今は早遠き昔と成ぬ。他家に比べて世にもさすらへ多き横井家に來り仕へしは、壽賀がまだ二十ばかりの時なりき。小楠先生の兄君病の爲に家督を先生に讓られし後は、先生に仕へて忠勤怠りなく、先生の夫人産後重きいたつきにかゝり、母子共に沒せられしきはみ、壽賀は獨りかたへに侍して、只管看護に油斷なく、能く己が任をつくしたりといふ。此頃横井家はさらぬだに豐ならぬ家計、いよ／＼困難を極めたる時なれば、壽賀は半季ごとの給料さへもうけざりし時もありしならむ。程なくわが大伯母君つせ子の君の嫁ぎ給ひて、主婦となり給ふに及びては、よく大伯母君を補けて、當時世中やう／＼物さわがしき比なりしをもて、あるは先生に面謁を乞はんとて、あるは先生の意見をきかんとて、日毎に出入る人多き家の內を、何事も難なくをさめえたりき。さて大伯母君は時雄みや子二人の君を生給ひしが、兄なる時雄ぬしは、幼なき時はいたく病身にて、人々の心痛一方ならず、手に手をつくしゝ困難も、大方は壽賀の熱心によりて育てあげられぬ。やう／＼心もいさゝか落ゐて、すべてのうさは過し昔の事とかたらひゐし程もなく、又も恐ろしきまがつみは此軒端を音づれぬ。そは小楠先生の京都にてあへなくも毒刄にたをれ給ひし事なりけり。それより後は以前の困苦にまさるなげきを凌ぎ／＼て、あるは自ら畑を耕せし事もあり、あるはものをいとなみ出て賣りし事もありきとか。志か身をくるしめいそしみて、時雄君兄妹の生長を指折てまちわたり、病がちなる大伯母君を常によく慰めまゐらせぬ。やう／＼靜なる生涯の中にも、先生の御かたみなる刄のこぼれしに血の跡さびたる短刀を見る折などは昔を忍びいてゝ、如何にかなしき夕べも多かりけむ。それよりあまたの年月よくつかへしさまはみじかき筆にかきつくしがたし。

近き頃に至りては、時雄君の幼子娣弟をひたすらねもごろにおぼしたてゝ、仕ふる主人はかはれど、仕ふる身は昨日をけふと、わが身の老行くはおもはず、幼子の皆人となり給はんとのみ待わたりぬ。去年の冬大伯母君失せ給ひしよりは、ひとりさびしき月日をかこちわびつゝも、時雄君の妹みや子ぬしの嫁ぎ給へる神戸なる海老名君の家にありて、昔をとふやさしき人あれば、たゞうきをわすれて喜びかたるとなむ、まことに女子の龜鑑とたゝへつべく、たとふべきものなき忠節は世にきこえわたりて、明治のはじめつ方熊本藩廳より其行を賞して金子若干を給へりとぞ。かくあまた年主家にまめやかに仕ふるのみならず、親しき疎きの別なく、人の爲になるべき事としいへば、時をわすれ我れをすてゝつくさずといふ事なし。わが身さいつ年父母の君と共に千葉の家にありし時、物學びに東京に出てしばし本郷なる横井家にやどりてありしに、壽賀は朝夕何くれとなく心づけくれて、いたく其なさけをうけし身なれば、今に其あつき心わすられず、折あらば何をがなむくいせまほしと思ひをるのみにて、いまだえはたさぬこそ口惜しけれ。本郷にありし比わがいつも學びやより歸り來れば、夜な〳〵大伯母君の御部屋に至るに、冬の寒さはわかき身にてもたへがたきものよ、あたゝかく火入れてあれば、こゝに來てしばしぬくまれよと、大伯母君の給ふまに〳〵亘燵の中に入るに、茶などくみまして、味よきもの取いでゝ給ふが、何よりも嬉しく樂しみにて臥床に入給ふ比まで、くさ〳〵の御物語して遊びしに、壽賀も共にかたはらに在てをかしき事どもいひ出ては人々を笑はせぬ。其比壽賀は、常に明日の用事をも夜の内に大方とゝのへおきて、いねんとする前には、必ず大きなる目鏡を取いだして、かな文字にて記したる聖書を一節つゝよみゐたりき。あはれの老女よ御身の目は常闇となりぬ。今は

夜ごと〳〵に誰かれのかな文字の聖書をとりて、御身によみてきかするならん。

年老しわはれの君よちかゝらば
　音づれ行てなぐさめましを
心してさはりなかれよ吹わたる
　秋風さむきあした夕べに
なき君のいましまさばとおもふらむ
　御代のさかえをきくにつけても
雪霜をしのぎ〳〵しなよ竹の
　高きみさをに習ひてしかな
たゆみなき君が心を梶とさん
　うき世の波を渡るべき身は

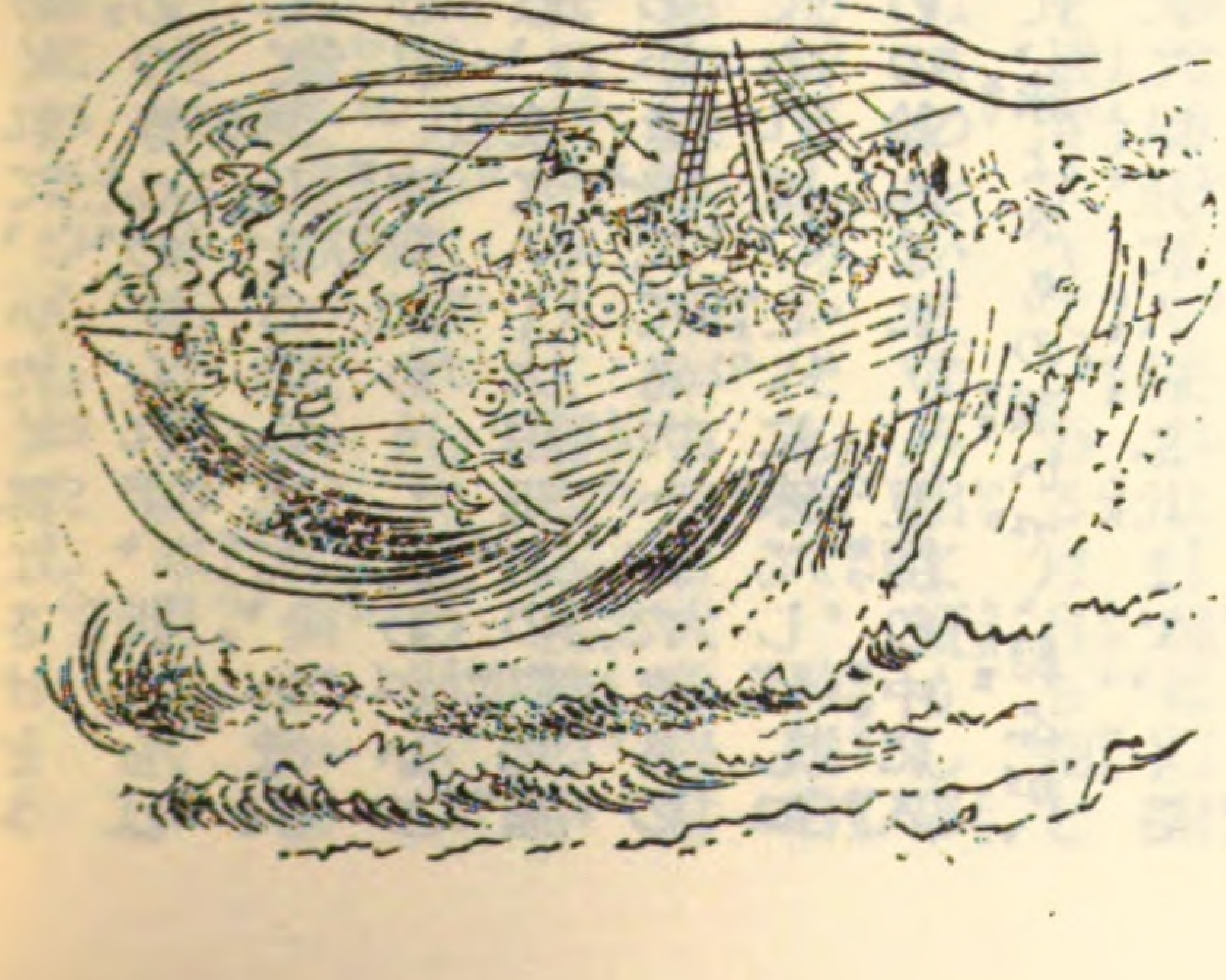
此ふみは徳富大伯父君大伯母君の御物がたりをうけ給はり、かつは父母の君のかたりきかせ給へるまに〳〵、かつ〳〵記しつるになん。事實にたがへるふしもあらば、よく正してかき改むべくこそ。

十月卅日秋の雨しめやかにふりすさぶ夜ともし火の下に筆をとりて遙に壽賀の君を思ひやりつゝ

ブラウニー隊の航海

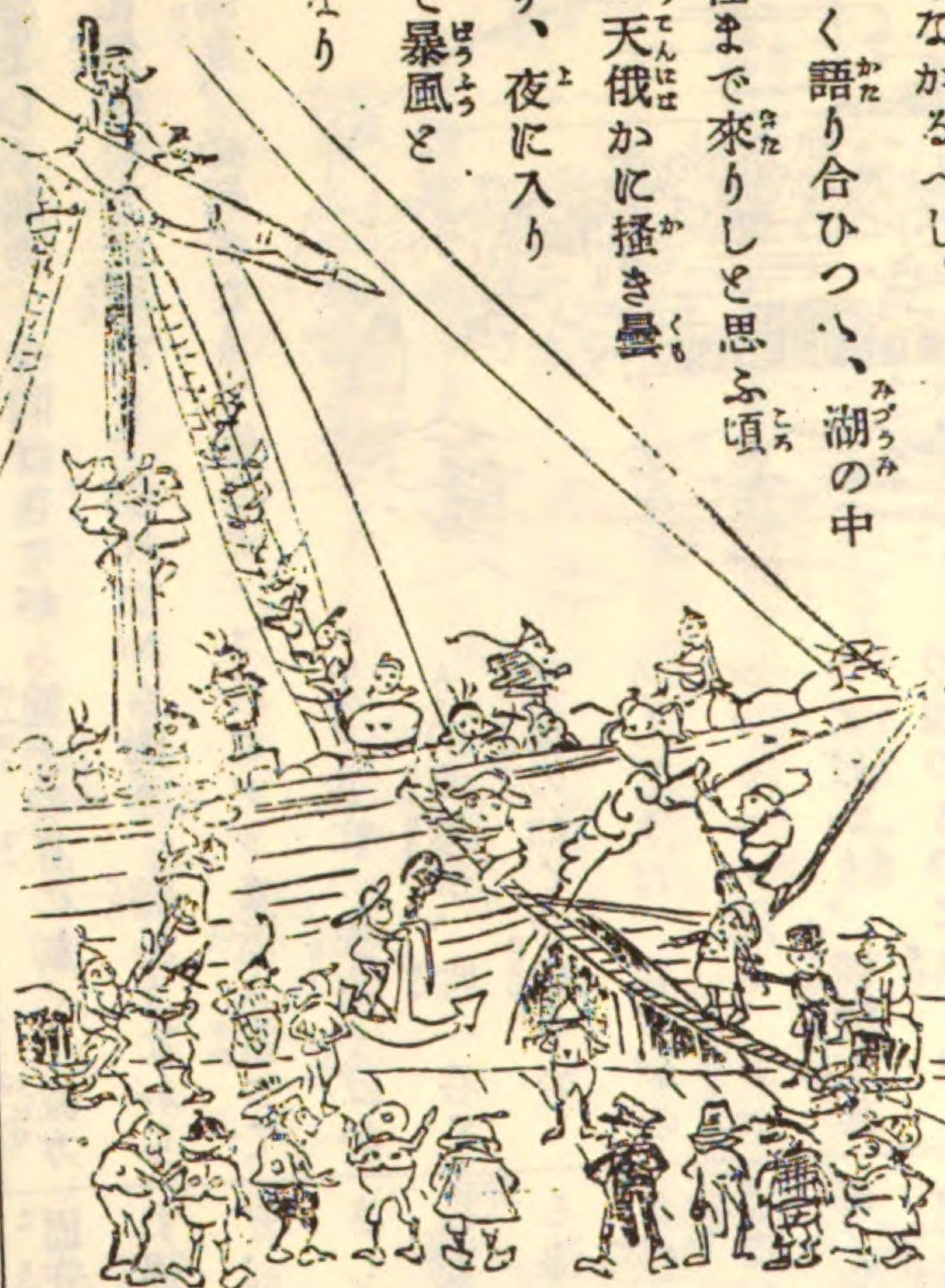


「帆を揚げい！」「纜を解けい」との命令下るや、二檣の船は埠頭を離れて、徐々と進歩を初めたり。乘組の者は皆血氣盛のブラウニー隊、目的は海上六十餘里の水路を航して彼岸に達せんとするにあり。『我輩等は諸君も知



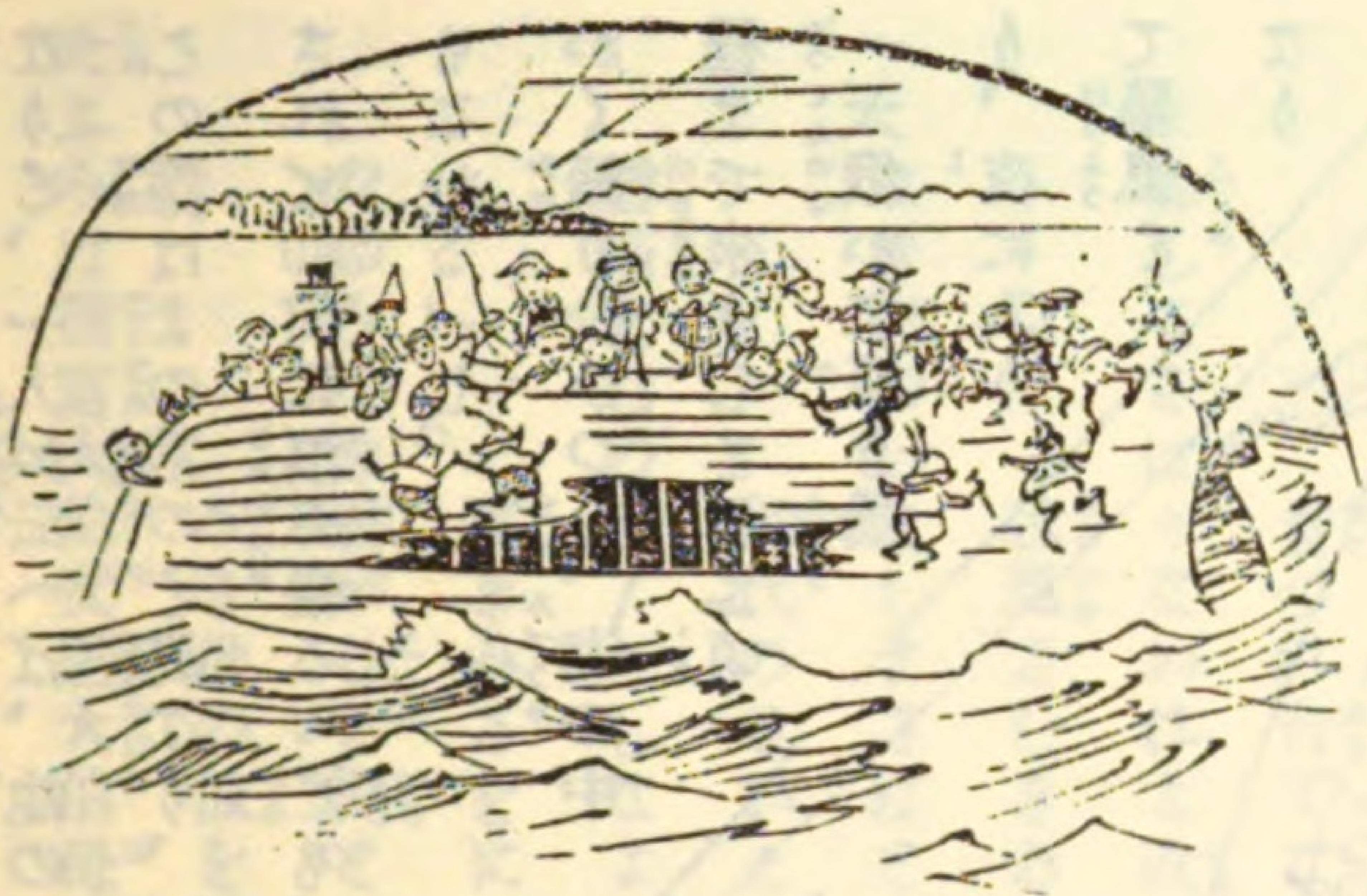
れる如く、年こそ若けれ、多年海上を家となし、風浪の上を縦横自在に平地の如く、駈け回りし、老功のものなれば、この度の航海もかの浪荒く潮急なる大西洋に比すれば、餘程氣樂で安全なりと、一人が云へば、他の一人はその語尾を受けて、ときにこの灘はよの常のと異なり、浪荒くして甚だ危險なりと聞く、されど如何に浪風暴るゝとも、恐怖を知らぬ我等には、何の詮もなかるべし。

かく語り合ひつゝ、湖の中程まで來りしと思ふ頃一天俄かに掻き曇り、夜に入りて暴風と成りぬ。隊長は帆を卸せいと疾呼しぬ。一同は飛鳥の如く、帆桁の上に攀ち登りぬ。時に風は益々烈しく、浪は愈々荒く、檣の打ち折らるゝ音

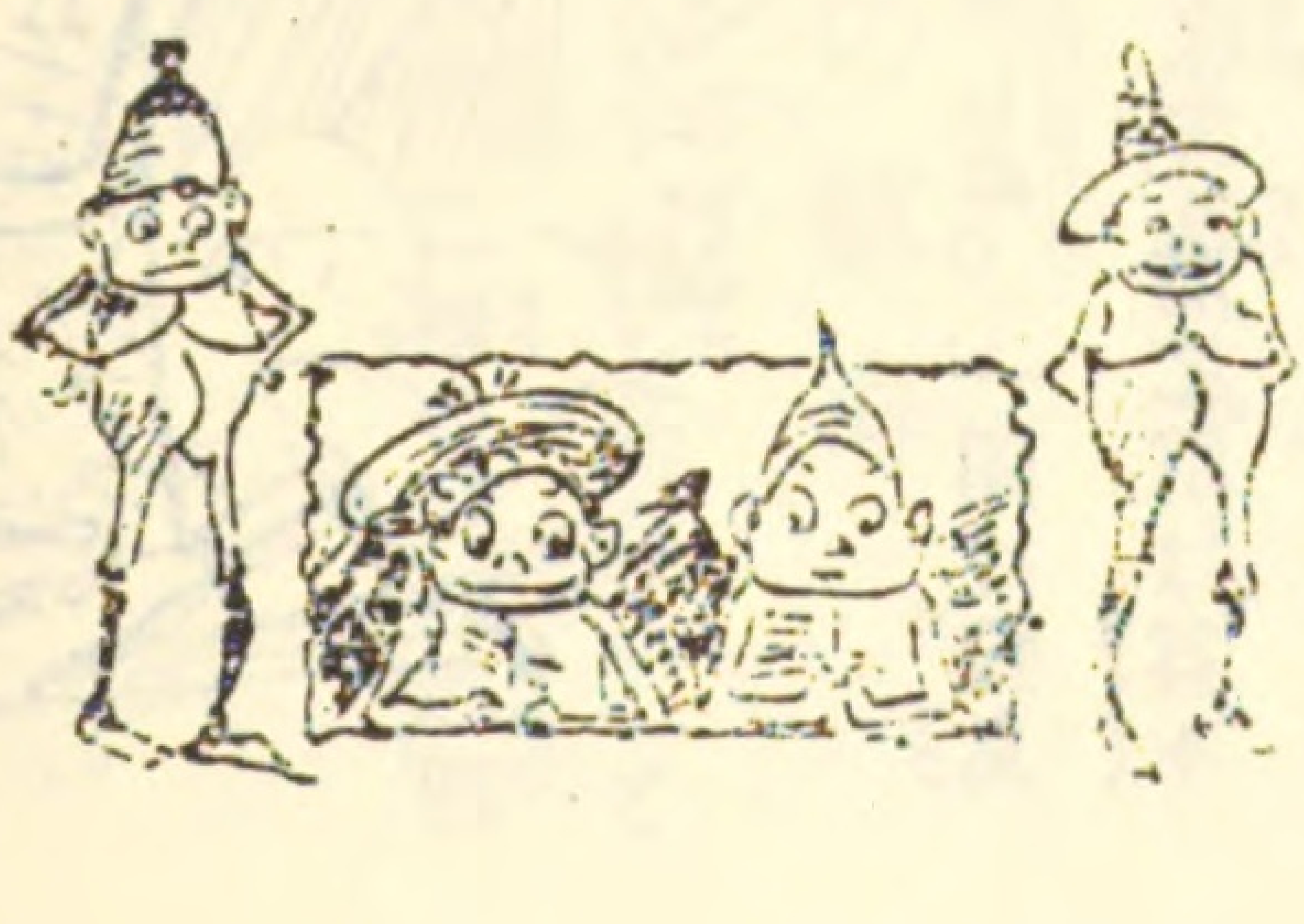




凄まじく聞ゆ。一同はさながら盤上の豆の如く、彼方に倒れ此方に轉かり、倒れながら働き、轉かりながら働き、必死となりて働きぬ。されどドッと吹き當つて



嵐と共に、雲突くばかりの高浪が、唯一呑と雪崩の如く、飜りかゝりしときは、さすがのブラウニー隊も、アナヤとばかり、檣横木其の他のものに縋りつきぬ。その時の恐しさ、怖さ加減を知るものは、恐らく樂しき本國を逐放せられて、絕海孤島に流されし人のみならん。されど剛毅なるブラウニー隊は、尙ほ撓まず屈せず、その秘術と熟練とを以て、風と浪か未だ打破せざる部分を固守せんと力めたり、されど誰か逆巻く大浪、吹き下す强風に對して舟を進め得べきぞ、世に名たゝる巧匠が造りたる、さしも堅牢なる二檣の船も、覆沒して、遂に鱗ある動物のみ來往する海底の碇泊所に往生しぬ。ブラウニーの一隊は、船板にからみ着きながら、風のまに〳〵、浪のまに〳〵、押流されしが、遂にある陸地に漂ひ着きけり。あな嬉しと上陸して見れば、豈圖らん、此處は先に出帆したりし埠頭なりしかば、こはいかにと、夜の明け、太陽に見られぬ間にと、隱れ家見つけて逃げ込みぬ。



あらたまの年の終になるごとに
雪も我身もふりまさるなり
(在原元方)

談叢

海上の生活＝慣れなる水夫

瑞溪生

陸にあり此世の競爭に、汗せして其日を暮せる人等は、時として海上の生活を羨ましく思ふ事あるべし。海上の生活は一種世外的にして、はげしき生存競爭の爲に其手足と精神とを勞する事なし。されど又其丈に憂き事の多かる者ぞ。空晴れ、月清く、風なく波おだやかなる夜、一抹の煙遠く棚引き、船脚いと速きときは、ア、此海上の生活の樂しきことよ吾れまた何の時乎好んで世間の紛擾に入らんやと、轉た身の幸福を思ひ、快樂の外また心中思ふところなければ、一度び風雲一變して雲蒸し、風起り、波高く雨加はりて、先きに長閑げに張りたる日掩の、破るゝ計りにすさまじき音して、帆檣につなぎだる「リウギング」の音のおそろしく聞ゆる時は、甲板の上には潮流れ、船房の中には器具散亂し、コップ破れ、硯飛ぶ、ア、此時！此時にあたりて、何の因果か吾れは斯かる恐ろしき生業をばなさゞる可らざる乎との念を發せざる者稀なるべし。



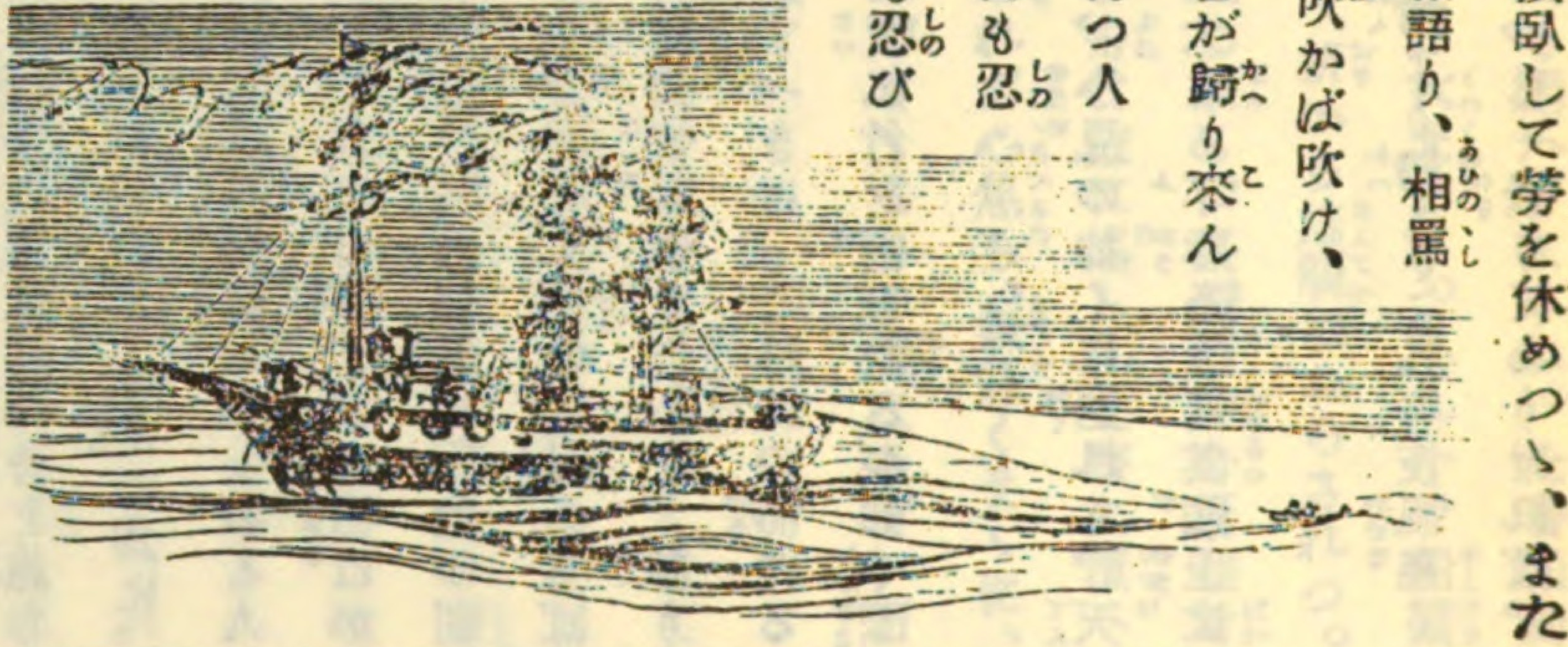
かゝるおそろしきわちきなき業にも身を委ねて、其一生を送らんとする者ある乎。海上の生活は活氣汪溢なる青年に取りては餘りに憂しとも思

はざるべけれど、かの半白の人にして尙ほ此業にあるもの、世は分業に成立つ者とはいへ、吾はあまりになさけなしと思へるなりく

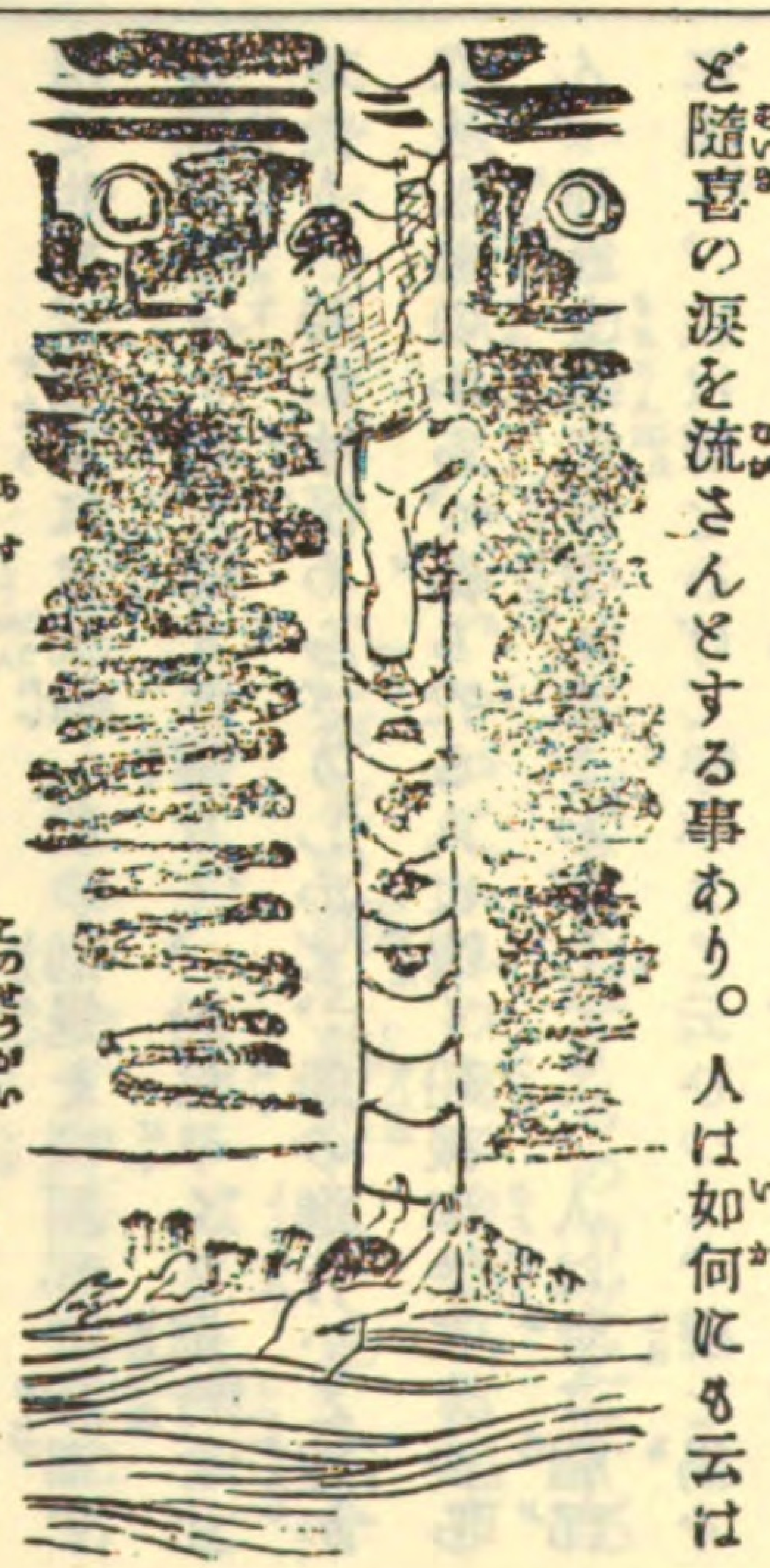
かゝる恐ろしき時機に際して、忽ち危に近よらざるべからざるは船中に所謂水夫なる者なり。風荒み波あらくなり來らば、かれ等は命令の下に、あるひは危き欄干に立ちて、襲ひ來る波に其足場を奪はれんとし、あるひは高く檣上に登りて風に吹き去られんとす。凡て潮に洗はれ波風に吹かるゝ甲板の上に立ちて勞働する者は皆是れ水夫なり。雪降る夜は甲板凍りてかれ等に靴を穿たしめず、雨降る夜には、意地悪き雨かれ等が一枚の雨衣を徹してかれ等が全身を潤ふす。去かもかれ等は人の思ふ程にも苦しとなさず、アゝ苦しからざるにあらず、其日の生業と思へばこそ、其苦をも忍ぶなれ。彼等は船房にありて如何なる快樂をか有する。月淸き夜なりとも、波靜かなる夜なりとも、天然を見て喜び天然を見て歌ひ、以て其心を慰むるにもあらず。彼等は業終れば、其日の疲勞に、其まゝ一枚の毛布を蒙りて橫臥する而已。彼等の樂那處にかある、あはれむべきは彼等の生涯にぞある。たま〳〵風波を凌んで港に歸りたりとて、其をなぐさむる妻あるにあらず、相見て喜笑する兄妹あるにあらず、慈親あるにあらず、彼等は如何に無聊を感ずべきぞ！アゝ此心無聊を如何にすべき！

此無聊はかれ等を驅つて陸に上せ、一夜の快を貪らしむ、或は露點に到り、或は樓に登り、はしたなき子女を捕へて傍若無人の戲をなし、一杯の酒に醉ふては茶樓の主婦に財嚢を空ふせらる、嗚呼一夜の豪遊！一夜の夢！彼等が激浪怒濤の内にありて輸し得たるところ、全く水泡と歸し去らずんばあらず。然れども嘗て彼等の一言是を憾みたる事なく、手を空うして復外洋に出づ。然のみならず、船房の内にありて、あるひは

甲板の上にありて、互に横臥して勞を休めつゝ、また互に働きつゝあるとき、相語り、相罵り、相笑ふ彼等を聽く、風吹かば吹け、波荒るれば荒れよ、また吾が歸り來ん日をかの女は待つらめ、待つ人あればこそかくもつらき目も忍ぶなれ。然なり／＼かくも忍びて得たる金をば、汝が懷より奪はんとてかの女ぞ待つ。汝が上をぞ自ら云ひつるおかしさよ、ア、かの女は今ま吾が上を夢みて愛らしき寢顏に微笑の波をばたてやまつべし。さればこそ、なが水に溺れたる夢をや見つべし。ありし昔のながおかしき



面をば思ひ出でゝ、あなおかしと微笑みやしつべしと。是彼等が談柄なり。斯てかれ等は一點其心に顧慮するところなし。於戯人は如何にも云はゞいへ、余は水夫等が勞働の如何に無邪氣なるかを見て、時として殆んど隨喜の涙を流さんとする事あり。人は如何にも云はゞ云へ、彼等が明日を知らざる此生涯を送るを見て、余は非難の聲をあぐる能はず。かれ等の性行の治まらざるを見て余は一概に彼等を責むる能はず。乞ふ世間多情の人よ、道義の一面を以てかれ等を責むる事なかれ、願はくは彼等が無心の反面を觀よ。ア、吾は彼等の如何に無心なるかを見て、殆んど自失せん計りに感



動せらるゝなり、而して遂に其不道德を見るに違あらざるなり。視よ世には如何に野心の爲に其心身を焦しつゝある人の多きぞ、或は名譽の爲に、或は富の爲に、また視よ、如何に罪惡の爲に其心身を勞しつゝある人の多きぞ、覆載の間もかれ等が爲には狹く、光明はかれ等に住居を與へず。假令千金の美人を得て千金の別墅に居り、酒池の樂ありとも、其心に一の汚點あらばまた何の樂しきところぞ、何の快よきところぞ、却りて思へば、貴とぶべく、愛すべきは、これ此の渺たる水夫の心なりけり、其心は實に竹を割きたるが如く潔く、氷の如く清し。

かく罪なく、心やさしく、小兒の如くに送れる、天然の佳兒にも、時としては大なる不幸ありて其頭上に落ち來る事あり。

去ぬる月の終、我船の臺灣より歸るとき、一夜風無く波おだやかなりしが、空は少しく曇りてありければ、其夜は月夜なりしかど、月も見えず。物おだやかにして、また物凄し。朝來張りたる日蓋の紐ゆるみたるがありしを、夜更けて後の風に奪ひ去られんを恐れて、欄干の鐵鎖に引きしめつゝありしに、如何にしたりけん、一人の水夫足場を失して海中に陷入りたり。人や落ちぬ、人や落ちぬと呼ぶ聲に驚きて吾は船房を走り出でしに、船橋には號鈴（船の進退を機關部に指圖する號鈴なり）續けさまに響きて、船は早くも進行を止めたり。時に寸隙あらざりしかど、船の進行いと速かなりしものから、落ちたる人は遠く船後になりつらん、甲板を走る足音いとさわがしくて、人は皆な艫部に集り、或は聲をあげて呼べよと云ひつゝ、聲を揚ぐるもあり、あるひは靜かにせよ、落ちたる男の呼ぶ聲聞ゆるぞといへるあり。此時遙か下手の方より風につれて憫れに助を乞ふ聲來れり。聲ぞ聞ゆる、かれは此下手にありそのゝしり合ふ其聲のあまりに噪はがしく

して、たはれなる救助の聲も聞へずなりぬ。此時船側にあたり、闇を破りて光れる火光あり。是れ今、船橋より投げたる發火ブイなり、折から端艇はおろされつ。さすがにおだやかなりと見し波も、臺灣の沖合百哩計りのところにてあれば、小舟は波に搖られて將に覆へらん計りに見ゆ、其をも恐れず心焦ち、氣急くまゝに、力を限りに漕げども、思ふがまゝならぬ樣なるぞいと物凄き。

かくて求むれども、其所在を得ず、今は詮術なしとて端艇をも釣上げたりしに不思議や、右舷の方はるかに人聲のするを聞けり、人々は皆な、かしこにかゝの聲するぞとて、其方にはせ集れり、かくてあはれなる聲はしきりに近より來れり、視れば波浪の中を游げるかれの姿ぞ見ゆる、ブイを！ブイを！と云ふまゝに、かれは波に漂ひながら彼が先きに足場を失したる下に來れり。繩梯は此時早く甲板より釣られたり。かれは梯を取れり、されど今は梯を登るの力なし。人は下り行けり。太き綱はかれの躰を纏ひながらにかれを釣り上げたり。ア、此時の彼の喜果して如何にぞや、かれが如何に數多度び『謝す吾友よ』と繰り返したるかを想像せよ。

かれは勿論立つの力なし、また坐するの力だになし。甲板に横臥しながら、やがてかれの友の持來れる毛布に身をつゝまれつゝ、己が友の顔を熟視しつゝ云ふ『今は吾命助かりぬ、謝す吾友よ、……思へば〳〵襯衣を裂き捨てしときの苦しかりし事!!』と、吾は其傍にありて此語を聞き、悵然たりしこと良々久しかりき、かれが水にありしこと一時間なりしを知らば、かれが如何に苦しみたるかを想像するに足らん。

此時早く醫師は來れり。一碗のブランデーを飲ましめ、且つ皮下注射をなし、あたゝかき船房につれ行きて、尙ほ不意の事あらんを慮り、あるひは豚搏をう

かゝひ、心臟の鼓動を聽き、かれをして水をはかしめなどしてありしが、仰臥したりし彼は、やがて俯せ返りて、自ら指を口に挿入れ多量の潮水をはきたりと見る間に、彼が喉にあやしの音おこりて、かれが兩手は強く握り、かれが兩眼は靜かに閉ぢぬ。

かれは遂に縡切れたるなり。

かれが斯く不意に縡切れんとは誰も思はざりしなるべし、かれ自らさへ斯かるべしとは思はざりしなるべし。今にして思へばかれが襯衣を裂きしときの苦しかりしを語りし一語は如何に吾等の心を傷ましむるぞ。アヽ、此一語はかれが最後にのこしたるかれが勇氣の紀念なるかな。

かれがしたしき友等は相集りてかれがなきがらをば棺におさめつ。今は要なしいざ寢ねんと口には云へど、何れも皆な心の此に殘りてか、棺のあたりを立ち去らんともせず。下手をながむれば、あやしの火光の、一閃一滅する見ゆ、憫れなる水夫の靈の此世に心殘して、尙ほ波上に漂へるか。――あやしの火光にもあらず、まして死せる水夫の靈にあらず。前きに投げたる發火ブイの尙ほ其光を發するなりける。

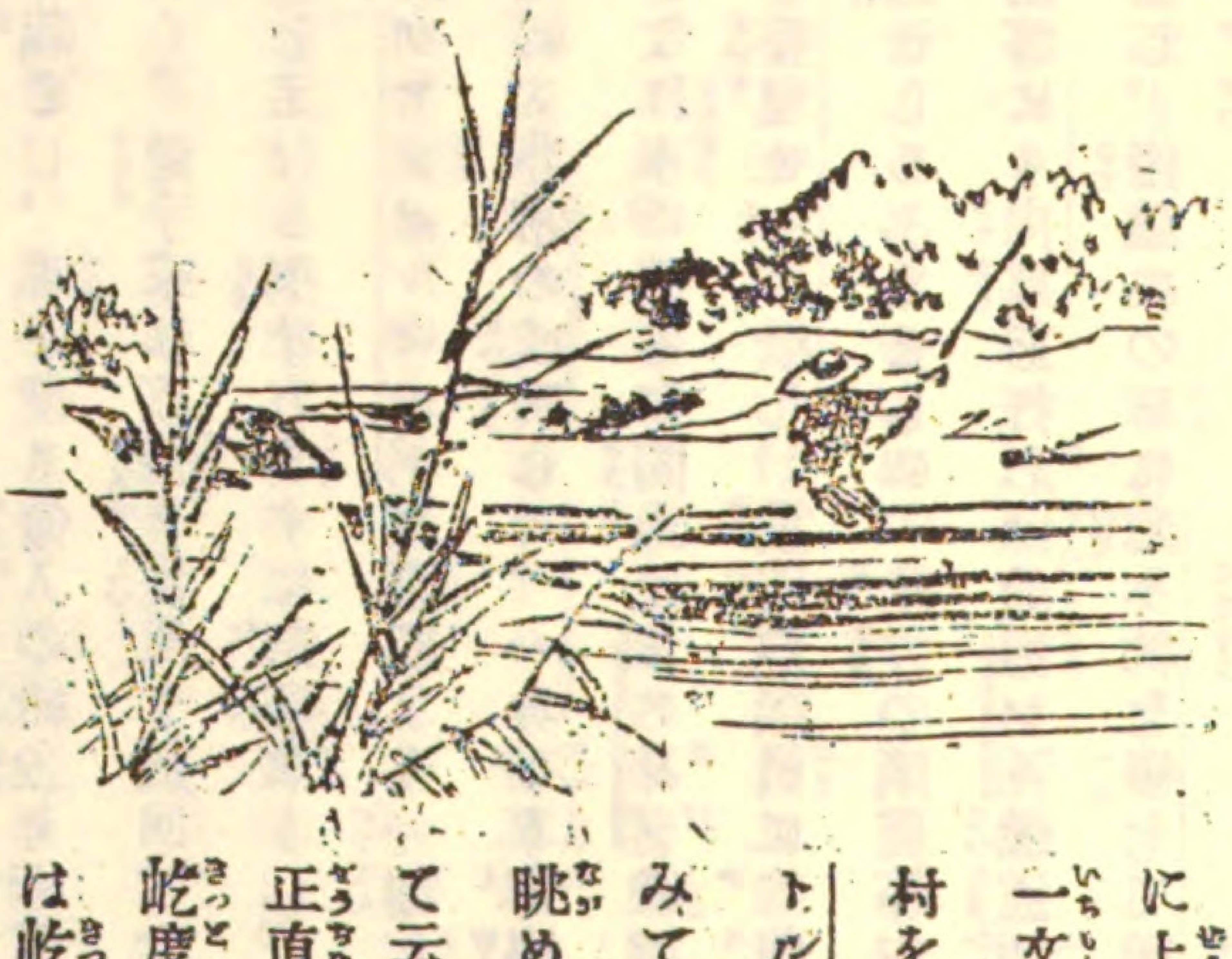
苦多きをも苦多しとせず、樂少なきをも樂少しとせず、無邪氣に己が生業を勵める、憫にもまた可憐なる水夫の生涯は時にかゝる悲運に終る事あり、アヽ！只に水夫といはず、機關に手を捕へられ、足を奪はれ、時には全身細破さるゝ火夫、あやまつて艙中に落ち船底の鐵板に頭腦を細碎せらるゝ人夫、いづれかあはれなる最後にあらざる。』海上の生活をなすものは多く皆な斯の如くにして、また時々斯の如く終ることあり。吾は吾邦將來の爲にかゝる悲しき生活を記することを好まず、しかも是れ人生の一事實なるを如何せんや。

金儲け

楓葉

唾壺と金は溜る程汚なくなるとは、金儲けの暗き半面を云いしものにて、金錢は品行なりとは其明るき半面を云いたるものなり。如何程香しからぬ人物にても、無一文より起りて巨萬の富を致すは、必ず其人に他の及ぶ能はざる長所あるによるものにて、心に覺へば其人の生涯には色々心得となること多きものなり。明るき方の金儲けの摸範とも云ふ可きフランクリンの故郷なる米國にては、此種の教訓まことに多し。

新約克のアストル家を云へば、世界にて十本の指の中に入る豪富なるが、其家の起原を質せば、滔々たるミシシツピーの流れもまことに葎のしづく萩の下露より起るを知るに足れり。ジョン、ゼコブ、アストルはもと獨逸人なり。二十歳の時、米國に行きて立身出世の道を求めんとて、風呂敷つゝみ一つ肩にして故郷を立出でたり。元來貧乏無教育の男にて、教師とては唯吾母、教課書は聖書と祈禱本のみ。港に行くにも、とぼ〳〵歩み行き、下等船賃だけは所持したれども、米國に上陸したる時は無一文なりき。故郷の村を立出る時、アストルは菩提樹下に佇みてつく〴〵故里を眺めやり、心に誓いて云ふ樣、吾は屹度正直にす可し、吾は屹度勉強す可し、吾は屹度賭博をせざる可しと。死に到るまで、アストルは此誓を守りき。偖アストルは千七百八十三年米國に着せしが、船中にて毛皮商と相識り、是がアストル立身の手引となりたり。



アストルは米國に渡る時、兄の家より笛七本携へ渡りしが、米國に着すると齊しく、此笛を賣りて毛皮の商賣に入り込み、非常の勤勉辛抱を以て、信用を作り、從て身代を作れり。後家富み身榮ふるに及びて常に人に語りて曰ひけるは、自分の身代を作るに、尤も困難なりしは最初の千弗なりしと。斯てアストルは千辛萬苦して此最初の千弗を作り、終に米國毛皮會社を建てて巨萬の富を致し、子孫相嗣で今日のアストル家を興せり。

コモドオル、ヴァンダルビルトの名は世界に聞ふる富豪なり。其立身の由來を尋ぬるに、元來無一文の小供として生活の戰場に打て出で、小少より舟乘となりて、初めはステートン島より新約克への渡舟の船頭なりけるが、非常に强情なる決斷の速やき男にて、程なく一滊船の船長となり、頓て諸處の滊船と競爭し、資本を積むでいよ／＼其手を廣げたり。然れば此地方にて面倒なる賣買事は一も二もヴァンダルビルトに持て行けと云ふ勢にて、其一商賣にかけて誠實敏捷大丈夫なりしは、嘖々として今も人口に殘れり。常に現金取引を主義とし、唯一度も傭人の給金を延引せしめたることなく、賣手來れば鋭き質問十數回、直ちに手をうつて値を定むる捌け方ますに無類なりし。

偖ヴァンダルビルトは滊船より一轉して、鐵道に移り、此にも非常の成功して、一身より市場を左右するの勢となれり。然るに同氏はホドソン鐵道とハアレム鐵道を整理せんと欲し、議院の議員に依頼して此方案を通過せしめんとせしに、味方の議員等内々陰謀して我知己等にも内幕を打あけ、ハレム鐵道株を片端より賣り出し、偖議決の日に臨み約を變じて議案に反對して之を否決し、いざ是より大儲けす可し先日來あれ程賣り出し置きたるに此方案否決となれば、ハアレム株の大下落此時なり、今か／＼と待ちけるに、其日は一向價

動かず、二日、三日目となりては案に相違してハアレム株は驚く可く騰りたり。是れヴァンダルビルトが採決の二三日前隠謀を漏れ聞きて、有る限りの資金を擲ち、ハアレム株を片端より買收して机の抽斗に奥深く仕舞置きたるの致す所なりき。此が爲めに新約克には大富豪の俄かに破産に瀕したる者も多かりしに、ヴァンダルビルトは其機智にて謀につきて謀をなし、敵の刄にて敵を殺したるなり。

ヴァンダルビルトまた太洋汽船航路を開き見むとて、自費にて見事なる汽船一艘を拵へ、折しも米國の舊三菱とも云ふ可きコリンス組の汽船一艘不足したるを、手船にて補はむと要求せしに、コリンスは大威張りしてすげなく之を拒絶したれば、ヴァンダルビルト憤然として、然らば此方にも了簡あり、一生涯かゝりても資産を擲つても見事汽船航路を吾有として見す可しとて、直ちに政府に向ひ、今後無一文無報酬にて若干年間郵便物の搬送を引受け申す可し、右について十二分の保證金を納む可しとて、手を盡して周旋せしかば、政府は一議にも及ばずコリンス組に與へし國庫の補助を取り去つて、事をヴァンダルビルトに一任し、瞬く間にコリンス組の汽船幾艘は新約克埠頭に日に／＼腐り行くことゝなりぬ。

ヴァンダルビルトは八十歳に及ぶまでも、身躰倔强にて、下町の事務所より上町の事務所にかけて奔走し、其間にはハアレムやホドソン停車場を見つくるい、客あれば接し、事あれば捌き、少しも老を知らざりし。事務にかけては、右の如く强情にして生馬の眼をぬく程の男なりしも、誠に交りよき人間にて、慈善事業にも注意し、流石米人とて愛國の心に富み、南北戰爭の時なども北部の軍艦缺乏に際し、米國第一の早足船「ヴアンダルビルト」號を軍裝して政府に献じたることもありたり。

那須の面影（上）

是れ俳諧の心得ある、一武人の温泉日記中より、扱萃せしもの、那須の自然、風俗、温泉事情、温泉の交際、温泉場の快樂、逸豫に於ける武士質氣、歴々として身其地を歴、其人に接するが如し

（前畧）やう〱暮近き頃那須の湯本に着きぬ。道々も馬引けるおのこに、おのれは性質閑寂を好めば、靜なる宿りに馬引きつけてよと賴みけるに、彼が親戚なるもの、近き比新宅をまつらひけれど、未だ造作もとゝかざれば、客も少なからんといひぬるまゝ、それにこそと約束し、着く否や、馬引かけて見るに、思ふに違ふて客の多き事いふべきやうなく、迚も宿りも叶ひ難くて、かれこれ馬ひき歩きて、軒ごとに宿りを求めければ、いづれも取り込みなれば、外を賴み給へといへるに、是非なし。己れつく〲思ひけるに、此年頃の望みにて、故さら主君より暇を賜ひて、此里にまかりぬるに、空しく戻りてんも實に本意なく、殊に日は西山に沒して、一泊の宿りも得がたきはいかなる事にやと、思ひ惱みて、やう〱下のかたなる富田や甚右衞門といへるにまかり、臺所の隅にても雨露を凌ぎぬれば事足りぬるまゝかしてよと、馬方と倶に、ひたすらに賴みて、やう〱借り得て、草鞋をとき、店のはしなる二疊敷の、きたなく汚れたる所借りて、玉の臺に坐したる如く、大いに安堵しぬ。

仙境に入りしおもひの嬉しさよ、
　　よごれしちりも玉と見るまで。

夫より直ぐに、宿の前なる河原湯てふに浴し、暫らくありければ、宿の子供來りて、はじめては長湯宜しからず、必ずのぼせるよし、深切に云ひ物しけるまゝ、とく上りて、此日は夫切にて、程なく夜に入りければ、日頃の草臥にて其儘臥せりぬ。

七月廿八日

當宿の温泉臺都合八ッ有り

一、行人湯　二、鹿の湯　三、御所の湯　四、瀧の湯

五、中の湯　六、富田の湯　七、河原湯　八、非人の湯

いづれの湯にても、熱くも温くも、割り水のさし引自在也。行人湯は清みて奇麗なり。中の湯も同じ。余は皆硫黄色なしたるなり。瀧の湯は冷なるよし、其功能は、濕疾の類はいづれにても請合ふて愈ゆ由し、宿の主が云ひぬ。一町の市街六年以前燒失せりと聞く。其前迄は六七十軒もありけるよし、當時四五十軒もあるべきか、己れ才は生れて俗事に疎く、算へみんと思ひて、終に其事せで仕舞ひぬ。始終は數へてみんと思ひ侍り。

二階の客立ける由にて、隣坐敷の女二階へうつりければ、おのれ其後に居替りていさゝかくつろぎてよし。今一人二階に逗留の客に、本國(此人常陸の人なれば)水戶那珂郡西の一木彌助といふものあり、五十路越へたる農夫にて、いと靜に悠々たる生れの人なり。折り〳〵尋て噺し合ひ侍り、又同加倉井村の藤右衛門夫婦も參り合せて、合宿なりけるが、これも折々尋ね吳けるまゝ大いに鬱を晴らしぬ。今日は道行人を眺め居侍りしに、はからず金井村なる甚兵衛に逢ひぬ、翌日は戻れるよしなれば、宿許への書狀たのみ、猶傳言など賴み侍る。又梟町なる吉郎兵衛次男名は忘れたり、これも前を通りけるを呼び入れて、暫し物語し侍り、未の刻比より今日も雷鳴夕立あり、昨日の如く強からず、鹿の湯にて、大町白木屋の三男に遇ひぬ。笹屋萬介も參りゐるよしかたりぬ、こは福田村の農夫にて、前なる湯にて遇ひぬ。

秋雨や誠を語る國の人

宿に乞ふて、小半紙に半切求めて、國への書狀の用になしぬ、此日は主が妖婦傳をかしけるまゝ、ひねもす是を見て更に退屈の心なし。

夜に入りなん比、日光街道眞間田宿なる夫婦のもの、同じ坐敷に割込みにと、宿の主が頼みにまかせ、兎も角もとて、此夜より一處に住居ぬ。是鹿沼屋藤兵衛といへるにて脊は六尺あまり、色黒く、眼中凄き生れ、年も四十路二ッ越へ厄年のよし妻も色黒く、三十路を五ッこへたるよし、夫婦ともに利發のものなり。藤兵衛は見かけにたかひ、殊に貞實の者にて、何か世話し呉れ、妻も同志のものにて、何くれとなく、厚く深切に世話し呉くつろぎて同じ國の人の如く。隔意なく附合、大いにたのしく覺えぬ。

いつ迄も秋風立つな部屋の友



同廿九日

朝天色晴れ渡りぬ。朝とくおきて前なる湯に浴し、通りをながめ侍る折、金井村なる甚兵衛出立のよし、暇乞にとて立寄り、宿への状は昨日頼み置きぬれば、言傳こまやかにたのみ別れ侍り。

骨にしむおもひも秋の暑さかな

上の八島屋には、水府藩の由、若黨など連れたる若人逗留せり、人品賤しき人なり。那須屋にも同藩と見え、人柄善き若人やどりぬ。其外上の宿には、武夫とみゆるも見え侍れど、下の方には武夫は壹人も見あたらず、これをもておのれのみ勇威をはげまして、江戸坐風の吟

百萬騎我が鼻息そ初嵐

桃を商ふ賤の女の來たりて、無理にすゝめけるまゝ、十個ばかり求めけるに、そが友なるよし又二人來て、是非にまた〳〵求めよと頻りにすゝめ押賣しけるもをかしく、一人より五ッづゝもとめける餘り戯によめる、

もゝとせを二十あつめて二千歳
我かことふきをさつけられけり

同 三 十 日

今日は下れる人より登りの方多し、宿々の賑はひは例年に覺ずとの事なり。中の湯にて剃髮したる翁、奥田川の人のよし、謠をうたひけるに其聲實に妙絶なり。おのれこの道志らざれど、餘りに妙音なるまゝ、觀世をなされしやと尋ねけるに、志かなりと答へき。五十年餘り稽古し侍れど、出來ざるよし、謙譲にいひき、實におそるべし。

今日は、中野屋樓上にて、柳河柳枝といへるが軍書の講説を聽きぬ。

石山軍記、兵法修諌傳、小倉袴、

講師は當國大田原の産のよし、辯舌達者なれど、田舎言葉にて聞惡き所あり。

朝より夜迄今日は八遍湯浴しぬ、夕暮餅賣の子供來たり、五つ六つ求めたるに、味ひ美なり。

山里の餅にも咲くや萩の花

八月朔日曇天

朝より雲立て見ゆ、起き／＼に中の湯にまかり、髮月代なして、朝餉も志まひ、又ゝ河原湯に浴し、大いに草臥たるやうに覺ゆ、今日は八朔の祝ひ日なれば、小豆飯を出しけるまゝ

紅葉するはしめもみえて小豆めし

けふの祝ひ日は白帷子なるに、山家にはさる事も見及ばず、唯山登りせる行者の衣服の白の白きも、時に取りての風情あり。

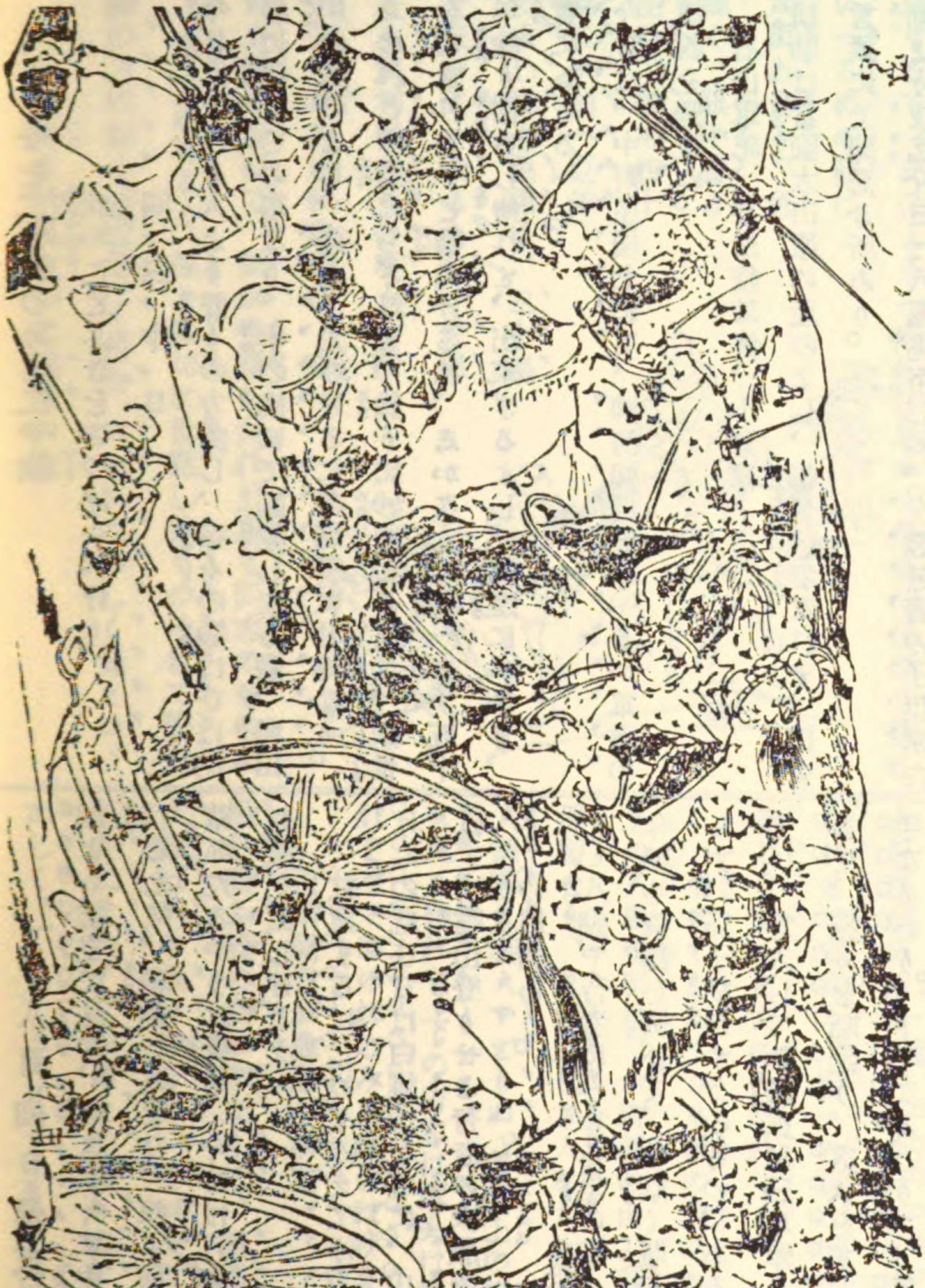
八朔や行者にみゆる里の俗

今朝も夜霧を拂ひて、物鬻く賤の女幾人といふ數を知らず、茄子胡瓜やうのもの、あるは蜀黍、葉生姜のたくひ、壹人して駄馬貳足三足牽き來り、山際に繋ぎ置きて、家々を駈廻り、客人をすゝめあるきぬるに、上手なるあり、下手なるありて、里の市場に異ならず、繁昌いはんかたなし。髮結ぶおのこなども、黒羽よりのほりたるよし、客の絶る間なし。さりし年も、貳人

して、二タ月に拾八金を得たるよし、人に語るを餘所にきゝぬ。

世界戰争畫報（二）

（三）ヴイツトリアの激戰（一八一三年六月二十一日）



此折畫に示す戰争は西暦一千八百十三年六月二十一日、ロールド、ウエリントンはジヨセフ、ボナパルトが率ゆる佛軍をしてピレニス山を越えしめずさ、スペイン國ウイツトリヤの野に激戰せり、時に佛軍七萬人、英葡同盟軍は八萬人と聞こえたり。大激戰の後、佛軍八千人の即死、夥多の俘虜、其他銃砲、彈藥、軍車、軍器を殘して敗

走せり、此の同盟軍の大勝利大打撃は再び佛軍をして力をスペインに伸ばし能はざらしめたれど、此役同盟軍の死傷五千人なりといふ。

◉歳暮物

▲海苔　歳暮の贈物として一寸器用に輕便なるは海苔なるべし殊に本年は大豐作にて品の良きのみにはあらで直段も頗る安く昨年に比して三割安なりといふ日本橋釘店の山形屋にては殊更ら念入れの躰裁善き進物用を調製する由なるが其相場はブリキ箱大判極上三帖入卅錢五帖入四十七錢七帖入六拾四錢紙箱大判上等三帖入二十錢五帖入三十二錢五厘なりと

▲雁鴨　は歳暮物としては上々の品なるが鴨類は今年は諸物價に連れ廉からず一双にて一圓二三十錢位あひ鴨は百目に付き十六錢にて中等物一羽八十錢位なりとの事雁は昨年よりは少し格安なりといふが一双にて二圓七八十錢位なり

▲鷄卵　は割安にて賣行も善く随分今年は賞用せらるべき景況なるが其直段は桐函二尺物二圓五十錢ゟ三圓まで尺八寸物にて壹圓五十錢より二圓位尺五物にて九十錢より一圓尺二寸物尺物に至て五十錢より三十五錢位迄の所お心まかせ何れにてもホール折にて尺二寸物は四十七八錢まで尺物は二十五錢より三十錢までなりと

▲漬物類　は種々樣々にて一々其直段を書記すこともなし難く是ぞといふべき品もなけれど正月は雜煮に舌だるき心地する人々も多かるべく宿醉の朝の茶漬の香の物是れは結構と案外喜ばるゝかも知れず先づ千枚漬樽入進物用は二十錢以上奈良漬樽入は三十錢より何れも躰裁よく調進の店々少なからず

▲炭　御勝手向き重寶の品なれど進物には不躰裁なれば兎角不向きの代物ならんが世帯馴れぢやと奥樣の御氣に入るが此處らなるべし唯今年は格高にて些と損なり但し堅炭は土釜より廉し

▲醬油　是も昨年よりは餘程高けれども何れも仕入れ安ゆゑ割合は善き方なり切符としての進物は至極宜しかるべし但し品と店とに注意せざれば勝手口のお出入を差止めらるべし

▲名產類　もいろ〳〵あれど先づコノワタ桶入五十錢より四十錢位カラスミは一圓より七十錢位越前雲膽桐箱入三十五錢より二十五錢十二錢位まで北海道產は鑵入にて二十五錢より十三四錢位劔先鰑一把七八十錢より五十錢位まで籠入興津鯛大物四十四五錢中となりて卅錢内外丹後袋鰑大一枚(五枚並べ)四十錢位なるが例年よりは一割五分高なりと聞く小田原鹽辛五升入一樽一圓三十錢銚子物は稍格安なり魚煎餅には鯛、きす、海老、とり貝などあるが百枚にて二十五錢位箱入籠入躰裁は御注文次第なり

▲鰹節　は本年割安物の中なるが下等品は存外の割高支那人の買入多き爲なる由箱入にして一圓より三圓位まで

▲鹽鱒　は鮭とは違ひ本年は割安にて一圓に六七本位次で田作魚も割合安く一圓に二貫目位

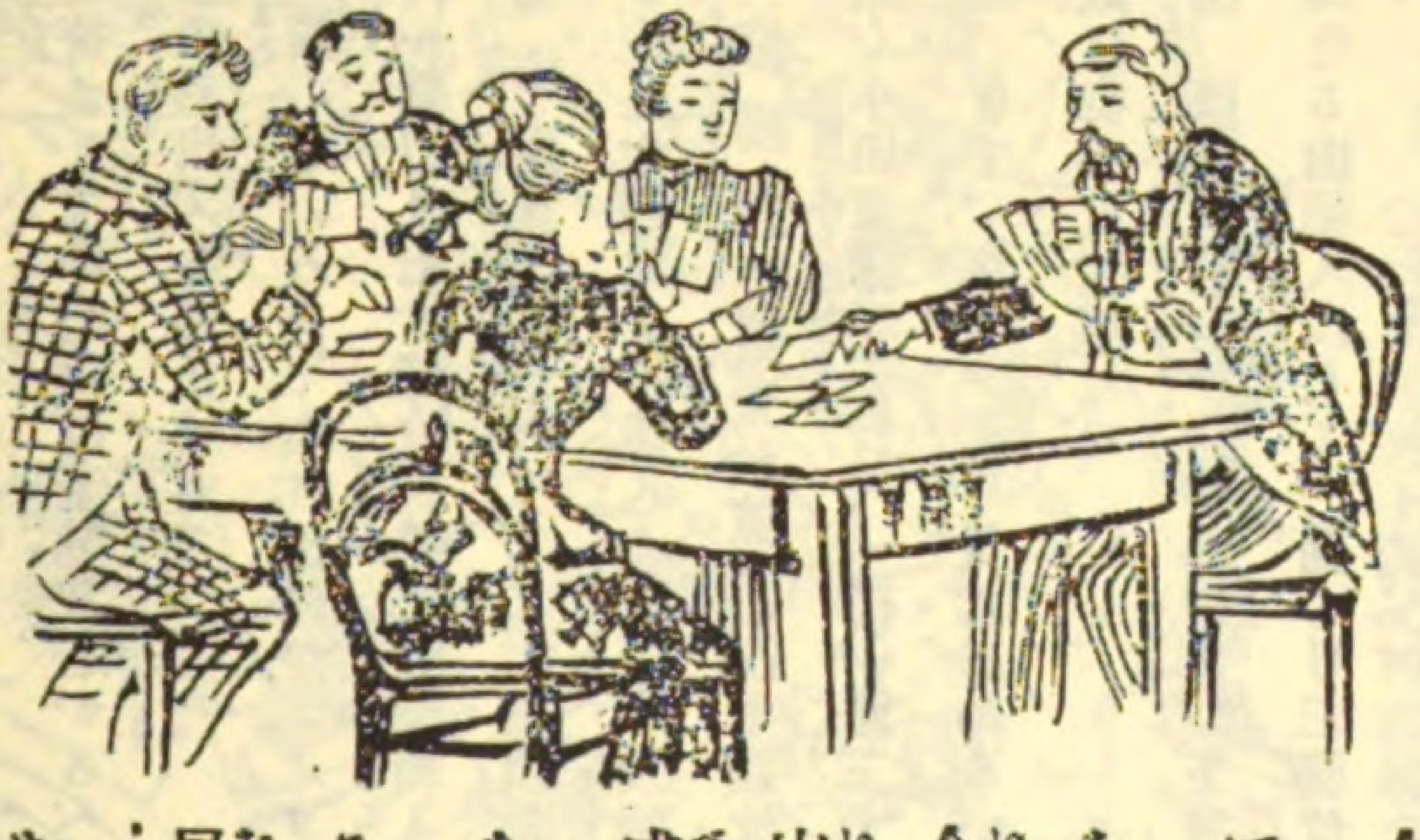
▲蜜柑は本年出來よけれど矢張直段は安からで一箱四十錢にては中物さはいひ難き由なり

家政

正月遊の一つ　ＫＫ

今年も暮になりぬ。數多の子女は母君の新衣をとゝのへ給ふを見て、轉た正月のたのしみを想ひ起し、毬羽根つきなど、さま〴〵のおもしろき遊を夢にも見、考へもし給ふらん。されば記者は正月の遊の一として、誰にも興味ありて有益なる遊を告げまゐらせん。

豫じめ一面にいろはと一字づゝ記したる、四十八枚の厚紙の札を作りおく。扨主客一同（人數に限りなし）、環坐し（または組を設くるもよし）其眞中に前の札を裏むけにならべ、先づ地名とか、草木の名とか、人名とか、鳥の名とか、魚の名とか、獸の名とか、蟲の名とか、何とか題目を定め、一同承知したる上、例へば今鳥の名と定む、誰にても一人、其札の一枚を手早く表にかへす、今かの字を記したる札出しとすれば、一同可成早くかの字の頭につきたる（むつかしくするには、其字の中或は尾につきたるものと定むるも可なり）鳥の名をいふ、今おとしさん第一に雁といひ、次に烏とか、鴨とか、いろ〴〵の名出づべし、而して此の勝利者はおとしさんなれば、おとしさんは其かの字の札をとるなり。次にまた食物の名とか何とか題を換へて（札の終るまで同題を用ふるも勝手なり）前の如く札をかへ



し、速かに答ふ。かくして札全く終りて後、最も多く札をとりたる人が眞の勝利者とす。勝者敗者の處分は勝手たるべし。

右はいろはを用ひたれど、アルハベットを用ふるとも隨意なり、其字數とても、適宜に増減して可なり。此は花骨牌などより無邪氣にして小供の遊戯などには最もよろしきものなり。

冬季日用雜事　同

日に〳〵寒氣まさり行けば、數多の人々は霜やけ、ひゞ等の誠に迷惑なるおみやげを頂戴するものなるが、ひゞはリスリン、からすうりの汁などの効藥あれども、霜燒の藥は知らぬ者多し。此には色々口傳あれど、立貝の殻を黒燒にして御飯粒とねりあはして紙にのべ、霜燒の部にはりつくれば、愈ゆる事妙なり。

ストーブ或は竈より煙の漏るゝ事あり。人手にかくれば繕はるゝものゝ、手細工にて出來れば、誠に便利なるものなり。即ち鐵粉と硫黄とを水にて練りまぜ、其部分に塗りおけば、火氣にて自然と礙固し、決してはなるゝ事なし。

冬物の洗濯　同

冬洗濯の心得を書くは、泰平の世に戰術を講ずると同樣似合はしからねど、却て大切なり。別して冬物の洗濯は主婦の注意し置かねばかなわぬものなり。

天鵞絨の非常に垢付たるときは、ベタか種油、或は胡麻油を木綿に浸し、摩擦して垢を浮ましむ、(油の代りにアンモニア水を用ふるも可なり)後テレベンティン油(藥店にあり)に入れてふりそゝげば可なり。伏したる毛を起すために、細かき穴ある器の上に裏を向けて

廣げ、湯氣にあつれば自然と毛起つなり。またブラッシユ或はかるかやのたわしにて癖を直しながら力を添ふべし。細き穴ある器なきときは白布にてもよし、白布を天鵞絨と重ねてシンシにてはり、前の如くするなり。

フランネルを洗ふには、餘り熱からざる石鹼水五ならば、曹達三の割合の混水を作り、フランネルを板の上に平らにひろげ、馬尾にて作りたるブラッシユにて摩擦し、後清水にそゝぎ絞らず水より引上げたるまゝ、竿或は糸に乾すべし。上等のフランネルならば、切につゝみ、水氣をたゝきとり、餘り強からぬ火熨をあつべし。白色のフランネルならば、白色の切につゝみ、其上より前の如く火熨をあつべし。

羅紗の服の洗濯（中以上の染）最初襟、袖口などの油垢をとり、後全躰を水に浸し、アンモニア一、水十五の割合のアンモニア水を作り、ブラッシユにつけて、毛の向きに摩擦し、後清水にふりそゝぎ、絞らずに乾すなり。又艶を出すために麻或は亞麻の實を煮立て、色つきたりと思ふ頃、其湯に浸す。大なるものは、ブラッシユにて付くるもよろし。然る後、引きのばして、箍の如き圓き器に着せて乾すべし、充分乾きたる後、極く薄き石鹼水、或は水を清潔なる木綿をあてたる上より打ふりて、火熨をあつべし。衿袖口など、別段垢付きたるときは、其部分を湯氣にあてゝ垢を浮ましめ、後アンモニア水にて洗ふ。其割合は通例のコップ（五勺位入）一杯の水に金匕（長一寸横七分位）一杯のアンモニアを混ず。洗ふ際泡立つは、垢の浮みたる兆なり。

手袋の洗ひ方は、さま〲あれど、簡單なる法は、牛乳（コップ一杯）に炭酸曹達（一匕）をまぜ、フランネルの切に浸し、手形或は我手にはめて摩擦し、後乾きたるフランネルにてふきとり、陰ぼしにす。半乾の時、

能く其格好を直しをくべし。

毛皮類の洗ひ方、手ぬくめ、引まわし等の柔毛の皮は、温飩粉をブラッシュにつけ、周く行き渡るやうに摩擦すべし、幾度か新らしき粉をつけて摩擦すれば垢見事に落つ。剛毛の皮は、糠を清潔なる器に入れ、こげぬ程に炙り、ブラッシュにつけて摩擦すべし。

毛布は、シャボン水の中に炭酸曹達を入れたる混水に浸し、ブラッシュにて摩擦し、後清水にて洗ひ、少し絞り、麻の袋の中に入れ、其袋の兩端に棒を入れ、柳絞にすべし。半乾のとき、ブラッシュにて或一方に摩擦して乾すべし。

家庭小言

指月

温和清秀なる家庭に養はれたる兒童は心身の調和發達順應して自ら天稟の美性を顯表すべきを以てその心思快活整秀にして後來よく大事業に堪ゆべき多幸なる人たるの素を養ふものなることを知らざるべからず性急にして激し易く懶惰放縱にして事に堪えず終に一生



佛國の細君風
(ヴエストミニスター・ガゼツト掲載)

を社會の不具者となり了るも凡てこれ家庭にある日受くる所の感化作用の良否に由るものにして春風和暄なる林園の花が美はしき實を結び氣候不順にして花時雨雪に侵されし枝の實を結ぶこと少きの道理を知らば思半に過ん

家庭整修の輕忽に附すべからざること夫れ斯の如し然れども愛に溺るゝものは緩に失し父母の性急にして激し易きが如きものは嚴に過ぎて爲にその中道を得ると

廣げ、湯氣にあつれば自然と毛起つなり。またブラッシュ或はかるかやのたわしにて癖を直しながら力を添ふべし。細き穴ある器なきときは白布にてもよし、白布を天鵞絨と重ねてシンシにてはり、前の如くするなり。

フランチルを洗ふには、餘り熱からざる石鹸水五ならば、曹達三の割合の混水を作り、フランチルを板の上に平らにひろげ、馬尾にて作りたるブラッシュにて摩擦し、後清水にそゝぎ絞らず水より引上げたるまゝ、竿或は糸に乾すべし。上等のフランチルならば、切につゝみ、水氣をたゝきとり、餘り強からぬ火熨をあつべし。白色のフランチルならば、白色の切につゝみ、其上より前の如く火熨をあつべし。

羅紗の服の洗濯（中以上の染）最初襟、袖口などの油垢をとり、後全躰を水に浸し、アンモニア一、水十五の割合のアンモニア水を作り、ブラッシュにつけて、毛の向きに摩擦し、後清水にふりそゝぎ、絞らずに乾すなり、又艶を出すために麻或は亜麻の實を煮立て、色つきたりと思ふ頃、其湯に浸す。大なるものは、ブラッシュにて付くるもよろし。然る後、引きのばして、箍の如き圓き器に着せて乾すべし、充分乾きたる後、極く薄き石鹸水、或は水を清潔なる木綿をあてたる上より打ふりて、火熨をあつべし。衿袖口など、別段垢付きたるときは、其部分を湯氣にあてゝ垢を浮ましめ、後アンモニア水にて洗ふ。其割合は通例のコップ（五勺位入）一杯の水に金匕（長一寸横七分位）一杯のアンモニアを混ず。洗ふ際泡立つは、垢の浮みたる兆なり。

手袋の洗ひ方は、さま〴〵あれど、簡單なる法は、牛乳（コップ一杯）に炭酸曹達（一匕）をまぜ、フランチルの切に浸し、手形或は我手にはめて摩擦し、後乾きたるフランチルにてふきとり、陰ぼしにす。半乾の時、

能く其格好を直志をくべし。

毛皮類の洗ひ方、手ぬくめ、引まわし等の柔毛の皮は、温飩粉をブラッシユにつけ、周く行き渡るやうに摩擦すべし、幾度か新らしき粉をつけて摩擦すれば垢見事に落つ。剛毛の皮は、糠を清潔なる器に入れ、こげぬ程に炙り、ブラッシユにつけて摩擦すべし。

毛布は、シヤボン水の中に炭酸曹達を入れたる混水に浸し、ブラッシユにて摩擦し、後清水にて洗ひ、少し絞り、麻の袋の中に入れ、其袋の両端に棒を入れ、柳絞にすべし。半乾のとき、ブラッシユにて或一方に摩擦して乾すべし。

家庭小言

指月

温和清秀なる家庭に養はれたる児童は心身の調和發達順應して自ら天稟の美性を顯表すべきを以てその心思快活整秀にして後來よく大事業に堪ゆべき多幸なる人たるの素を養ふものなることを知らざるべからず性急にして激し易く懶惰放縱にして事に堪えず終に一生を社會の不具者となり了るも凡てこれ家庭にある日受くる所の感化作用の良否に由るものにして春風和暄なる林園の花が美はしき實を結び氣候不順にして花時雨雪に侵されし枝の實を結ぶこと少きの道理を知らば思半に過ん



佛國の細君風
（ウエストミンスター・ガゼツト掲載）

家庭整修の輕忽に附すべからざること夫れ斯の如し然れども愛に溺るゝものは緩に失し父母の性急にして激し易きが如きものは嚴に過ぎて爲にその中道を得ると

と頗る難く可憐の兒孫をして終生を薄幸に沒了せしむるもの世間比々

今次に記する所のもの固より余の一家の私言只自ら書して家庭の誡となすに過ぎず

○兒童が善良なる心意より爲せる過失に就て之を叱責鞭撻して荒らく〳〵しく誹しるは父母のなすべき事柄にあらず須らく之を温和にさとすを要す

○小兒の面前にては醜陋の談話又は野卑なる行爲等を愼むべし凡て無垢なる兒童の心裡には善きも惡きも先入主となりて一生の素を爲すものなればなり宜しく潔白清嚴の擧動を目擊せしめてその善美なる天賦の稟性を誘掖すべし

○起居飮食等は規則正しく習慣せしめざるべからずかつ喫煙飮酒の如き害毒あるものは勉めて之を排斥し家庭に入らざらしむべし

○外貌を整齊し身躰を清潔にするの習慣を造れ又た居室を洒掃し美しき花卉を以て之を飾りその心神の開發を導くべし居室の高潔外貌



英國の細君風

(ウエストミンスターパゼツト掲載)

の整清なるは大に兒童心身の調和に關係を有するものなり

○父母の命令の嚴肅にして正當なることを心服せしむるは尤も大切なる事柄なり

○玩具は注意して智識開發に有益なるものを供せよ然れども過度に心氣を勞して却てその智力の萎縮するが如きことなきを謀らざるべからず

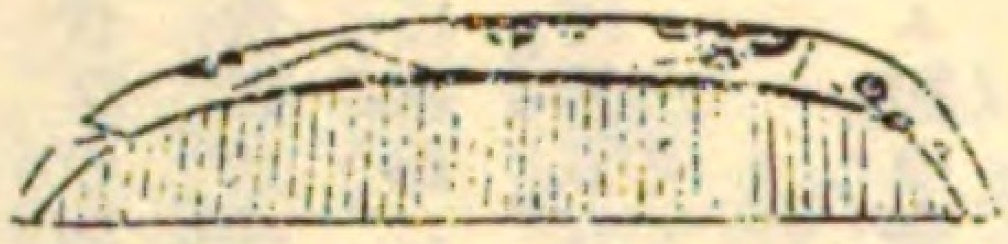
○兒童の行爲にして賞すべきものあれば之を稱讚するに躊躇すること勿れ凡て小兒は他の稱讚を上なく喜ぶものなれば之を行へば善良の行爲を誘發せしむる

の一法に外ならず
○兒童には充分に睡眠の時間を與へよ睡眠不充分なるに之を喚起するはその身躰の發育を妨げ心氣の調和を害すること甚だしきものなることを忘るべからず

社交一斑

流行の栞

流行子



新年のふだん櫛

挿繪に示せるは新年にさして面白き福びん形のふだん櫛にて樹臺に橋一塗にて輕くこふり梅を出したるものなり、



ふびらかんざし

「香も高し程もよし〳〵梅の春」の意より工夫せし簪にて名つけて「ふびらかんざし」といふ金メッキ、右二品價も廉なれば新年進物用に適す、(京橋區南傳馬町大西白牡丹發賣)

儀式用櫛と笄

昨年と流行形は差してかはられど、物價騰貴のため價格に於て本年は殊に昨年より價格張れり、キセ甲其他は差したることもなし

流行形は矢張半京形にして妙齡の婦人には山の高さ一寸三四分横三寸より三寸三四分、胸巾三分五六厘より四分許、年增向には山高一寸一二分、横二寸八九分より三寸まで胸二分五厘以上笄も昨年より長きかた、年々と大形になります〳〵昔にかへる傾あり

蒔繪物は政子形の深彫第一等の勢力を占め、おはつ形は二三分の形勢となりぬ

指環

此頃の流行は男子用にて純金か但しは銀臺金メッキのあらしを以て第一等とし、槌目又は石目之に亞ぎ、寶石入などは全く廢れたり、女用にてもあらし好位地を占め、槌目はちといかつき嫌あれば不向なれど石目はよし、婦人ものには寶石入もはやらぬにはあらず、寶石入の爪留にては「ダイヤモンド」の上位地にあるは申すまでもなけれど、●普通は「ルビー」か「サハヤ」なり、近來婦人の指環をはむる風情を見るに、從來は第四指なりしが、小指に小き寶石入の指環を用ゆるもの頗る多し、藝人社會には、蛇形の指環をはむること例の如しと雖、これは物なくは

へ込むといふ此筋の縁義に因るものなれば素人の學ぶべきとならず

伏裟形紙入

これは三四年以前にも流行せしものなるが、今度新形として流行し始めたり、一尺巾ばかりの伏裟の中に、二枚折の婦人紙入を綴ぢ入れ、外面は伏裟の如くにして、内を開けば二枚折あらはる、容所は一個所なれど伏裟と紙入の間にかくしあり、之にも紙幣など藏めらる、伏裟の布帛は重に縮緬にして、色物の裏地をつけしもの多く行はる、素より婦人物なれば銅貨などのザク〱と容れらるゝものでなし

帶どめ

ゴム製の全く癈れしは申すまでもなく、目下の流行は縮緬と組糸なり、縮緬の方は十八九以上即ち令閨向にして、組糸の方は八九歳より十五六までの年齢に愛好せらる、何故なれば縮緬の紐は通常の流行は巾三分にして妙齢の婦人にはそれより以上の巾もあれど、四分以上に至らば縮緬は寧ろ下品となるべければ、十二三歳位にして巾廣を好めば、是非とも組糸を取らざるべからず、さて金具は純金か、赤銅の深彫最も勢力を占め、銀、臺金メッキも追々流行、アルミ臺はズッと下りしものなり、摸様は予が既に稱道せし如く、菊と牡丹の二品流行界の最好位地を領し、心に小粒の寶石（金剛石、るびい、さはや、眞珠）等をはさむことも人望あり

履物

男子向には白鼠の鹿革に山水其他風流畫を描きたるもの、次は鼠の絹市樂、又は絹らつこ（孰れも表は南部、臺は米屋町）、地味なる好みは鹿革の南部表相變らず流行、雪駄は南部表の三枚重又は二枚重にして鼻緒は市樂、鹿革等

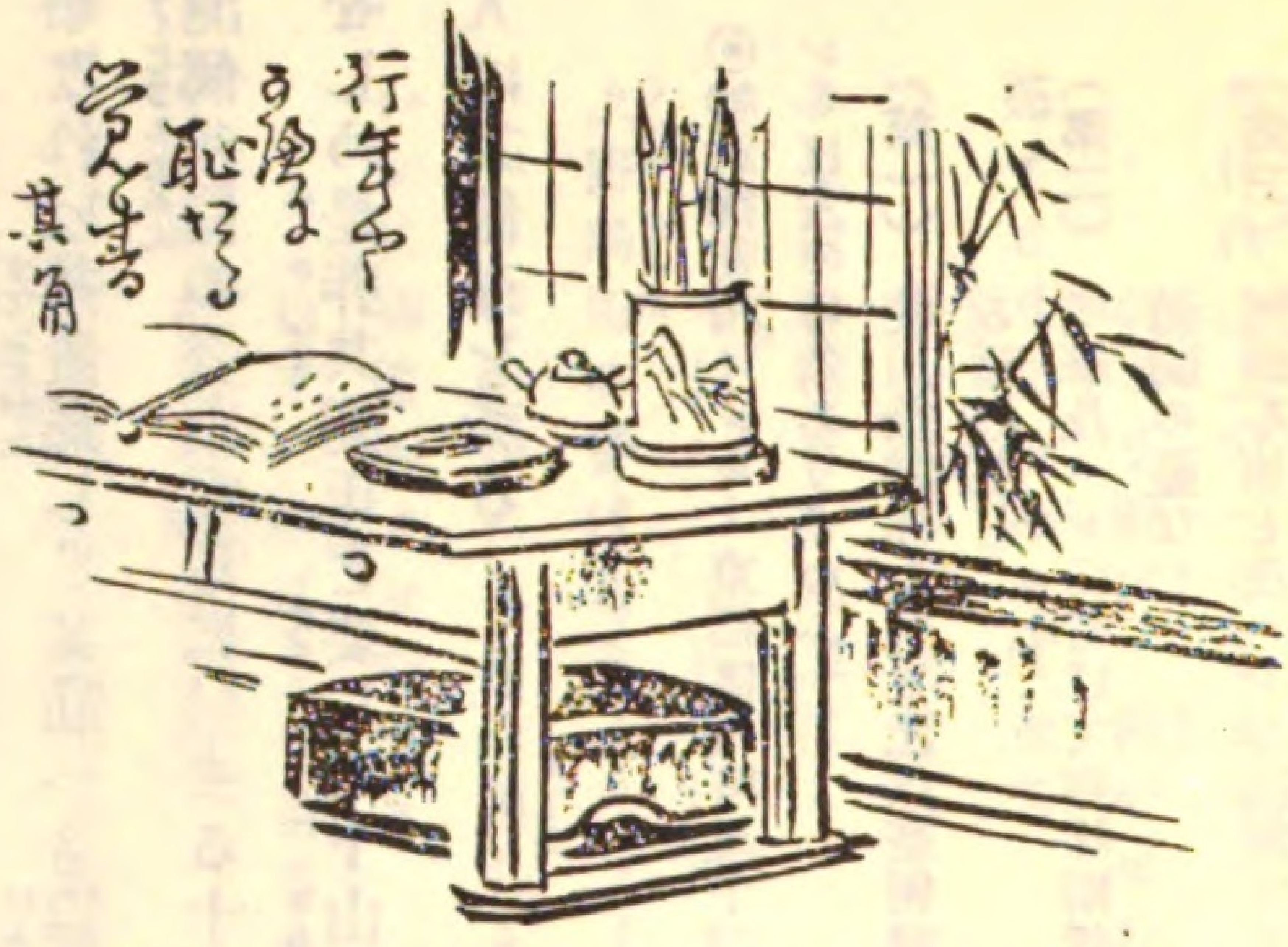
婦人向には妙齢の婦人には縮緬の古代紫又は古代茶、令閨向にはわな天の古代茶、臺は小町形一般の流行、黒塗は又一般の流行にしし兩ぐりや、米屋町や乃至小町形を木地のまゝに履くいつれ意氣な好みか、職人のおかみさん達と知るべし、惣じて臺の高さは一寸より二寸に至る、少女用には古代紫に菊水又はぼかしの友禪縮緬にして臺はポックリ、表は南部と藤表

雜録

歳暮（口繪のゑとき）

烏兎匆々已に本年も月華漸く凋みて僅に五六日を剩すのみ、歳暮に至れば新しき春を迎えんが爲に新しき器

具を求むるを萬物一新の縁義、これ東都の俗なり『年



の市』は新しき器物を購ふために開かる丶各所の市なり、其の最も盛大を極むるは淺草觀音の年の市（十二月十七八兩日）にして都人其盛況を見んと麇至蟻集す、其の商ふものは、羽子板、破魔弓、大黒俵、雑器、七五三飾等の縁義物より桶、小鉢、金物、笊等の臺所道具に至る、這も亦都人子女の娯樂の一に屬す

健在を祈る

富士山頂に越年して高層觀測を為せる野中至氏夫妻無事健全なりとは過般同氏慰問の為め登山せし山麓の有志者並に同氏の實弟清氏の報告に依て傳へられしが、其實至氏は目下水腫病に罹り居るよしにて其病勢いよ／＼危篤に迫り到底今後數ヶ月の間の嚴冬山嶺に在つて凌ぐ事能はざるべき危急の有様なるが、其病氣は一般の寒地に行はる丶特殊の病症にて顔色痛く憔悴し脚部は脚氣と同様に水腫を來して其居室より觀測所へ出掛くる間にも二三回は小休みをせねば歩まれぬほどにて食慾甚しく減退し氣分甚だ宜しからざるよし慰問の為め登山せし山麓有志の人々其病勢の容易ならぬに驚き一ト度び下山して療養を盡したる上にて再擧を謀られよと辭を盡くして諫めたれど同氏は始めより倒れて已むの決心なれば假令へ何程危急に迫るとて元より覺悟の上なり我が目的をして全ふせしめん為ならば死も亦悔ひずとて諸氏の好意を謝し願くは予をして此の志を成さしめよ、予は一寸も此處を動かざるの決心

なりとて斷然言ひ放ちて又動くべき氣色なかりしと云ふ右に付き慰問者の一人勝又惠造氏は事の容易ならぬを悟り野中氏が堅く口止めせし病狀の事を報告し何卒して同氏の一命を救はんとて下山直に出京し其由中央氣象臺の和田技師へも急報したるが和田氏は野中氏に對して豫て師執の關係あり且同氏の事業を嘉みしたる事なれば捨置難しと其筋へも協議する所あり幸ひ沼津測候所員の登山するに付去る十七日醫師同道にて登山せしめ是非共同氏を要して下山せしむる都合なりと吾人は其健在を祈る

◉特許簿記用インキ　京橋區桶町三十二番地□商店より賣出せし同インキは左の特效ありといふ

（第一）使用後酸化したる上は奈何程長く水中に入れ置くも消褪する恐れなし

（第二）毛筆及ペンに付けて和洋兩紙に書くも自由自在にして毫も濕潤の憂なし

（第三）毛筆を損し及ペンを侵蝕する事なし

（第四）濃墨なるが爲め適宜に水を交ゆるこさあるも濕潤の恐なし

（第五）紫濃黑色を帶びたる稀有の特色にして萬世不變色なり

（第六）數年を經るも沈澱物を生し若くは暑氣に腐敗し寒氣の爲め氷結するなし

（第七）墨の如く腐敗する憂無を以て墨壺に入て日用の簿記に使用するに適當也

（第八）口中に入れて舐るも健康上妨なし

歌苑

冬夕　（東京　水田みづほ）
空さむし林はさびしこぶさりもねぐらもさめてゆきくるゝらむ

夕しぐれ　（同　人）
ゆふしぐれ淡墨色のそらひくゝからす三つ四つさびまよふなり

秋朝二首　（淸水　無邪氣生）
あさまだき野邊の千草を踏み行けばこぼるゝ露のおもしろきかな
朝風にたもさ吹かせて濱つたひ三保の松原過ぎ行きにけり

辛崎の時雨　（近江　藤田　燕子）
比良の嶺越し行く雲は唐崎の松のわたりを時雨やすらん

殘菊　（同　人）
人はふり籬はあれし庭の端に一さ本菊のいさおしきかな

初冬　（同　人）
枯しほろすゝきに風の音するは冬や來にきさ告ぐるなりけり

秋の夜客舍にて　（常陸　田宮ぬゑ子）
千草にすだく虫の音にあはれぞまさる秋の夜中
旅寐の夢はむすぼれて涙に袖をしぼるなり

あの世の兄この世の妹　（水田みづほ）

あはれ兄上かへりきませ
　ひさり遊びて何かせむ
花さりさをあそばせて
　春の光は村ざさに
みちわたれろを兄上は
　今はいづこにおはすらむ
上野隅田の春げしき
　いかににほひの美しき
いかに御身をさゝむさも
　わすれ給はゞもろさもに
この村ざさの畦みちを
　あさはこてふにさそはれて
夕べは月におくられて
　あそびあろきし事はしも
三させの前のけふなろを
　こふれご／＼かひぞなき
かへらぬ兄をこふろさて
　あゝ世は夢か世はゆめか
かへり給はぬそのわけは
　花の綱手にあらずして
心の駒にむちうちて
　學の路にはげみつゝ
にしきかざりてかへらむさ
　つさめられけむ兄上を
あらはかなしやつれなしや
　無常の風にさそはれて
やみの旅路にあなあはれ
　飛花落葉は世のつれさ
知れごもさけぬおもひをば
　わらはのむれにのこしつゝ

なみだ　（みゆきの）

ぬば玉の
夜はふけぬらん　燈火の
かげいつしかに　きゑはてゝ
うらみわびけん　夢にさへ
むすぼれがちの　涙かな
戀人の
なさけにふれて　むすぼれし
露の涙か　あるはまた
いさしき人に　すてられし

恨む涙の　玉にてや
戀人を
うらむ涙の　つゆならば
よしむすぶとも　うちはらひ
なさけにふれし　ものならば
戀しき時の　思ひ出にせむ

きぬた　（信州　天眞）

はや父母は世を去りて
いまははかなくなりたれと
わかせの君ももろこしに
ゆきてかへらすなりたれと

われにすかりてにこ／＼と
笑ふこの子の可愛さに
此世のうきもわすられて
砧打つなり日れもすに

われにたかれてすや／＼と
れむるこの子の可愛さに
人となる日をたのみにて
きぬた打つなれ夜もすから

小木曾の里に秋ふけて
河風さむくなりぬれと
あしまかくれの一つやに
砧うつ音おやみなし

社告

歌苑

毎號『歌苑』の一欄を設け三十一文字及新躰歌（最も短篇を可とす）を汎く江湖に募る

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6～11巻・別冊1）

1987年1月10日 発行

定価 108,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房